

---

# 僕は芸能人、だけど中学生

伊崎瞬

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕は芸能人、だけど中学生

### 【Nコード】

N0354R

### 【作者名】

伊崎瞬

### 【あらすじ】

僕は芸能人、だけど中学生。

みんなには僕がテレビに出ていることは言っていなかった。

人生いつかは何かがばれるものだ。

そう、僕の正体のようにね。

どう瞬は生きていくのだろうか。

みなさん、温かく見守って。

## 第1話 自己紹介

僕は伊崎瞬。いざきしゅん

中学2年生だ。

しかし、僕は芸能人。

っていうかちょこちょこテレビに出ているだけ。

毎週水曜日7時の「こんにちは、みなさん」というトーク番組にレギュラー出演してるぐらいだ。

同級生も結構見ているらしい。

芸名は赤西海斗。あかにしかいと

ある木曜日。

教室に入ったらいつも女子が話していることがある。

「昨日の、こんみん、見た？超おもしろかったねえ〜。しかもさあ海斗ってやっぱトーク上手いよね。」

「本当だよねえ〜。あの勉強の話はびっくりした!」

「確かに〜!あれはびっくりだね。しかも、結構笑いも取れてたし…」

いつも女子はこんな感じなのだ。

僕はいつも聞き流すようにしているが、なぜか真剣に耳を傾けてしまっている。

反省点とかも見つかるし…

僕は普段、おとなしいイメージで通っている。

だから、まさか僕なんかがあの赤西海斗とは思われないだろう。

しかし、そうとも限らない。

僕は普段黒ぶちのめがねをかけているのだが、はずしたら赤西海斗になってしまうのだ。

だから極力眼鏡ははずさないようにしている。

ガラガラガラ…

「おはつよ～～～～！」お調子者の城ヶ崎晴海じょうがさきはるみがやってきた。一応幼馴染。

晴海は結構なお金持ちで登下校は運転手付きの車で、家には執事が3人も…

でも、お金持ちだけど晴海は嫌われていない。お金持ちという感じを全く出さないからだ。

執事の人にもちゃんと「さん付けで呼んでいるし、威張ってないし。晴海には妹の清海もいる。1つ下の学年だ。

そんな晴海の挨拶に周りの女子も普通に反応する。

「あつ、晴海い～～おはよ～～～～」

「おはよ～～^^」明るくていいのがうちのクラスの女子だ。

「よつ、瞬。おはよ」

「あつ、おはよう。今日も朝から元気だね」

「うん、まあね。」

僕は付き合っている。もう1年は軽く過ぎていく。

その日は普通に終わった。いつも通りだった。

そして週明けの月曜日のこと。

ある女子が騒ぎ始めた。

「ねえ、私さあちよつと気づいたんだけどさあ、瞬って海斗に似てない？」と言った。

本を読んでいたのだが思わずページをめくっていた手が止まった。すると晴海が

「そりゃないっしょ。あんなに大人しい瞬が？あんなにトークできると思う？」ナイスフオロー！

「そう言われればね。でも、似てるんだよなあ」その女子はあきらめたようだ。

すぐくホツとした。一回は教室から出ようかと思ったのだ。

その日から僕は、いつ赤西海斗というのがバレるのか心配になった。だからなるべく女子と顔をあわせないようにした。

男子とは思いつきり喋ったりした。

僕の一番の仲良しは隣の2組の猛たけるである。小学校のときから幼馴染。猛とは昼休みはほとんど喋ってばっかだった。

猛の恋について聞いてみたり、将来について聞いてみたり。

猛は本当の親友だった。

恐れていた時がきた。ついにばれた…

## 第1話 自己紹介（後書き）

コメントをお願いします。

## 第2話 発覚！

ついにばれた。

しかもばれたのがあの幼馴染の城ヶ崎晴海じょうがさきはるみだった。  
本当に何気ないことではれてしまった。

それはある金曜日の放課後だった。

僕は相変わらず教室で一人本を読んでいた。  
教室には僕一人しかいない。

確か5時27分ぐらいだったと思う。  
いきなりすごい音を立ててドアが開いた。

ガラガラ バン！

一瞬体がピクツっとなった。

そこには顔を真っ赤にしていた晴海がいた。  
そして僕に気づいた瞬間、

「ねえ、あたしの筆箱知らない！！？？今家に帰ったらなかったのよ！ねえ、知らない？？」

とすごい勢いで僕の胸倉をつかんできたのだ。それに揺らす。  
すごい勢いで揺らされた。その瞬間だった。

眼鏡が取れた。

カモフラージュ用につけていた眼鏡が取れた。

僕は急いで眼鏡を取ろうとしたけれど床に落ちたし、晴海に胸倉はつかまれたままだし動けなかった。

時が止まった。

何分ぐらい2人の動きが止まっただろうか。

聞こえてくるのは運動部の威勢のいい声だけだ。

「……………」

「……………えっ？」

最初に声をあげたのは晴海だった。

「そ、それより眼鏡取ってくれない？」

「あ、ああ、うん…」かなり動揺しているのがわかった。

はい、と手渡されてありがとうと言ってかけ直した。

「瞬、聞いてもいい？」やばいことになるかもしれないっ！

「う、うん。いいけど…」

「あんだ、伊崎瞬だよね？」

「うん。伊崎瞬ですが…」

「伊崎瞬であり赤西海斗なの？」やっぱり聞いてきたか。

僕は迷った。ここで本当のことを言うべきだろうか。

それとも嘘をついていつもびくびくしながら過ごすのか。

「……………うん。そうだよ。晴海の言ったとおりだよ」

「あ、やっぱりね。瞬が海斗な訳ないよね…って、ん？さっき肯定

した？」

「う、うん…」

晴海の顔色が変わった。

「え、じゃあさあ、伊崎瞬は赤西海斗で、赤西海斗は伊崎瞬な訳？」

「そうなります。ごめんね、今まで黙ってた…」

すると晴海の表情がすっごく明るくなって、

「ううん、いいの。っていうかそんなことは黙ってないといけない

ことじゃん。」

「そうなんだけどね…」

「私、誰にも言わないから安心して。でも、まさか瞬が海斗とはね

…」

「あんまり名前を出さないでよ。ってか本当に誰にも言わないでね。」

「了解！任せてっ！私、幸せものだと思わない？」

「なんで？お金持ちだから？」

「違うわよ。だって私は赤西海斗と付き合ってるんだよ！こんなすごいことないでしょ！？」

「晴海が付き合ってるのは伊崎瞬じゃないの？」

「伊崎瞬と赤西海斗。いわいる二股？」

「え〜晴海ってそういう人だったんだ…なんかショック…二股かけられるなんて…」

「冗談だつて！」

「わかってるよ。」

「もう、バカ！」肩を思いっきり叩かれた。

「痛いなあ、何すんだよ！」

「ふふふ。本当に海斗だね。」

「ああ…」

冗談が結構続いた。

こうしてるうちに5時50分になっていた。

「っていつか晴海、筆箱は？」

「あっ、机の中にあつたよ。」

「あつたんかい！まっ、見つかったならよかったね。」

「うん。」

「よし、帰るか。どうせ晴海は健之助けんのすけさんのお迎えがあるんだろ？」

「あ、今日は送っていくよ。健之助さんにも話しつけとくから。ほら、いこっ！」

本当にお嬢様な感じがしない。

運転手を「さん」付けで呼ぶお嬢様は晴海と清海きよみだけだろう。

玄関で靴を履き替えていると奥のほうから晴海を呼ぶ声がした。

「お姉ちゃん〜待ってよ〜」妹の清海だった。

「あつ、瞬先輩。こんにちは」

「こんにちは」礼儀正しい城ヶ崎姉妹である。

校門を出たら一台の車が止まった。

真っ黒のプリウスだった。

「お帰りなさいませ、お嬢様方。こちらは瞬様ですね？いつも晴海お嬢様がお世話になっております。」

「あ、いえいえ。こちらこそ晴海さんにはよくしてもらっています。」

「

「今日はお家のほうまでお送りいたします。どうぞお乗りください」  
「ありがとうございます。」

そうして僕と晴海と清海は健之助さんが運転するプリウスにのった。

車の中ではすごく盛り上がった。

健之助さんは落語が好きらしくて、面白いトークをしてくれた。  
家に着くまでがすごく楽しかった。

だんだん家が近くなってきた。

「あ、健之助さん。ここでいいですよ。あとは細い道なので。」

「わかりました。でわ、お気をつけてお帰りください。」

「はい、ありがとうございます」

と言って車を降りた。

「瞬、また明日ね。じゃ。」

「うん、じゃあね。」

「瞬先輩。また明日お会いしましょうね」

「ああ。会えたらね。」

とっつて車は走り去った。

清海がずつと手を振っていたので、僕も車が見えなくなるまで手を振り続けた。

「ただいま〜」

「お帰りなさい」母の伊崎敦子である。

「ご飯出来るから早く食べなさいよ。」

「っていつかまず着替えてくるわ。」

そして部屋に入って着替えているときに携帯が鳴った。

誰だろう、と思いディスプレイを見たら「城ヶ崎晴海」とでた。とりあえず、電話に出た。

「もしもし、さっきはありがとね。で、どうしたの？」

「さつき、瞬を下ろしてから家に帰るまで瞬の話になったの。そしてたらいきなり清海が『私、瞬先輩のことが好き！』って言い出したの。私、瞬と付き合ってること清海に言っただけでなくてさあ。どうすればいいものかね？」

「本当のことは言わなくていいよ。僕のほうから上手く傷つけないように教えるから。安心して。」

「わかった。ごめんね、忙しいときに電話して。じゃ、また明日」

「うん。また明日ね。」

そこで電話は切れた。

その後夕食を食べ、お風呂に入って、3時間勉強して寝た。

そしてそれから1ヶ月がたったある日のこと。

とうとう清海に真実を告げるときがきた。

## 第2話 発覚！（後書き）

感想のほうをよろしくお願いします。  
現状が全くわからないので。

### 第3話 告白

清海に告白されたのは、僕の正体が晴海にバレた1カ月後だった。僕はいつもどおり帰るために玄関の前で靴に履き替えていたときのことだった。

「伊崎先輩……、一緒に帰りませんか？」

「それはいいけど健之助さんは？」

「今日はお姉ちゃんを連れて帰っちゃいました。妹を置いていくなんてひどいと思いませんか？」

「まあね。」

それから校門までは無言だった。

今考えてみたら、覚悟を決めていたのかと思う。

「あの、せ、先輩。お話してもいいですか？」

「うん、どうかしたの？」

「先輩って、お姉ちゃんと付き合ってるんですか？」どこから仕入れた？

「え、えっ？どこからの情報？」

「うちの学年はみんな知っていましたよ。で、どうなんですか？」

「まあ、その通りでしょうかね……。」

「やっぱり、本当だったのですね……。」

それから一時、下を向きながら歩いていた。

僕は清海のこと気がなつてたまに様子をうかがっていた。

なんかあまりにも落ち込んでそうだったので、何か悪いことを言っただか空を見ながら考えていた。

気がつく、何かにぶつかった。

なんだろうと思ひ視線を下げてみたら…

「き、清海？どうしたの？」道を塞ぐかのように清海が立っていた。「先輩、好きです。もちろん結果はわかっていますが、これだけは言っておきたかったんです。お姉ちゃんにはかないませんですけど…」。「いきなりだった。」

普通に困惑してしまった。

「あ、ありがとう。でも、わかっていると思っけど俺は晴海のことを好きなんだ。もちろん、清海のこと嫌いじゃないよ。でも、やっぱり、後輩としか思えないかも…ごめんね。」

「は、はい。わかりました。」

ここでこの話は終わった。

なぜなら城ヶ崎家の黒プリウスが清海様のお迎えにきたからだ。

ナイスなタイミングでお迎えに来てくれたことがありがたかった。

それから2カ月後、僕たちは先輩たちの卒業式に参加した。

とても悲しかった。仲良くしていた先輩とも会えなくなるなんて…。

でも、そのあと城ヶ崎姉妹と遊びに行くことになった。

何もなければいいのだが…

## 第4話 気まずさ

そして、城ヶ崎姉妹と遊びに行く日がやってきた。いつも以上に緊張するのはなぜだろう。

晴海とのデートは慣れているって言うかそんなに緊張はしないのに…

待ち合わせは10時。

近くの駅だった。

9時50分までにつくようにいこうと思い、早めに家を出た。

そして駅に着いた。待ち合わせの場所に指定された南口のほうに出してみた。

すると

「伊崎先輩~~~~こっちですよ~~~~^^」と妹の清海。

「瞬、遅いよ!!」姉で僕の彼女の晴海。

清海に対しては「何でこんなに早く来てるの!?!」って突っ込みたくなり、

晴海には「別に俺、遅刻してないし。ってかあんたたちが早いんだし!」と突っ込みたくなかったが

「は、早いんだね。待ち合わせ10時じゃなかった?まだ9時47分ぐらいだけど?」

「だって、清海が『早く行こうよ!』ってうるさくて……」あきらめた感じで清海を見ている。

「まあまあ。とにかく行こうよ。電車もうすぐだよ。」

そのまま電車に乗り、舞浜駅まで行った。

今日はもちろんディズニールランドへお出かけ。

電車の中では清海が眠ってしまったので晴海と作戦を練っていた。

「さあ、どうしましょうか？アトラクション重視で行く？」  
「もちろんでしょ？でも、もうファストパスはだめかもだけど。」  
「並んでいる間に話ができるからいいんじゃない？」  
「そうだね。でも私、1時間以上は並ばないよ！」  
「それは難しいよね。でも、夜なら大丈夫かもね。」  
「そんなに遅くまでいて平気？」  
「平気平気。閉園時間まで遊べるよ。」  
「やったあー。瞬、思いつきり遊ぼうね。」  
「でも、清海はどうするのさ。」  
「もしかしたら清海の友達が来てるかも知れないって。2時間ぐら  
いは遊ばせとこうかなって。」  
「なるほど。その間2人だね。」  
「いっぱいお話ししようね。」  
「了解！」

そして、デイズニーランドについて思いっきり遊んだ。  
この日はなぜか思ったほどお客さんは多くなかった。  
1時間以上並ぶものはなかった。  
そして夜8時になるちよつと前のこと。  
「あれ、清海じゃん！こんなところで会うなんて偶然だね。」  
「同級生らしき女の子が話してきた。」  
「あつ、みつちゃん！なつちゃん！本当に偶然だね。ねえ、お姉ち  
ゃん、遊んできていい？」  
「いいよ。閉園時間になったらゲートのところまで来なさい。そこ  
に集合ね。」  
「うん！じゃ、あとでね」

こうして清海は友達と遊びに行った。  
これから晴海と2人だ。

もちろん、ノープランなんかじゃないぞ。

## 第5話 サプライズ！

清海と別れてから30分ほど経っただろうか。

買い物も終え、アトラクションにも思う存分乗れたので最後に園内を1周してベストショットを撮ろうという話になった。

園内をくまなく見て周り、いろんな角度から写真を撮っていた。

お陰で携帯の画像フォルダが満杯になった。

写真を撮りながら、僕は時間を確認した。

「そろそろ、かな……」

「ん？なにが？」 げっ！聞こえてたのかよ！独り言のはずだったの……

「ああ、いや、なんでもないよ。それより最後にシンデレラ城に行かない？」

「あっ、いいよ。」

そしていよいよ僕の計画が動き出す。

何をするのかといったらもちろん愛の告白。

この場所で告白するのは多いかもしれないけど、いい。気持ちが伝わればね。

そして、シンデレラ城の前について計画を実行に移す。

「晴海！」晴海との距離は2メートルくらいだ。

そして僕はゆっくり晴海に近づいた。

「目を閉じて」僕は小声でそう言った。

そしたら晴海が唇を潤すためだろうか。舌で唇をなめたのに気がついた。

「キスはしないっつーの」「心の中でそうつぶやき、背中のおぼんじりま

わった。

そこで僕は晴海の首にネックレスをつけてあげた。そして前に立ち、手をとってネックレスの先についているものを手のひらに載せた。

「目を開けて。」

「うっ、うん。」そういつて恐る恐る目を開けた。

「わあ！」大きな目がまたさらに大きくなった。

「な、なにこれ！？どうしたの？」

「うん？あっ、さっき買った。まあ、晴海にしては安いものだと思うけど……」

「ううん。これはお金で買えない価値があるね。」

「それなんかのCMで聞いたことあるぞ？」

「うふふ。」

僕が渡したのはミッキーとミニーが彫つてある指輪だった。

しかし、まだお互いに子供だからネックレスにした。

僕もおそろいのものを買った。

2つで約5万。僕には痛い出費だったが晴海のためならどうってことない。

「で、渡すので終わらないんだ。」

「うん……？」

「ちよっと早いけど、そ、その……えっと……大人になったら結婚しような！」

「……（照）」晴海が俯いてしまった。どうしよう……。

「うん！……いいよっ！！　　バサッ」いきなり、飛びついてきた。いきなりだったから体が少し後ろに下がったものの何とか受け止められた。

「よかった。それ、婚約指輪ね。大事にしてよ」

「了解っ！私、瞬も海斗も大好きだからね！」

「ありがとうございます」

なぜか晴海と2人ではいるときは赤西海斗になっってしまう。

晴海がそのほうがいいって言うからさ…

約束の時間になり、ゲートの前でやってくると清海が小走りで行ってきた。

「お、お姉ちゃん！悪いけど少し持って！！」

清海は遊びに行くときはなかったはずの、買い物袋が両手で収まりきらないほど持っていた。

『何をそんなに買ったの？』ハモった。

「友達といっぱい買った。あはっ」

「おい、早くしないと電車が混むよ！」

『はーい』城ヶ崎姉妹もハモる。

電車の中で俺と晴海は清海の話の聞き手にまわった。

友達と何をしたか、いくら使ったのか、何を買ったのか、全部話してくれた。

その話の中のこと。

「……それはお金使いすぎだね。」

「でしょ？っていうか今気がついたけど何で2人おそろいのネックレスしてるの？」

「あっ、これ？俺が晴海とおそろいのものを買ったの。」

「えええええ！私のは！！」

「残念。」

「お姉ちゃんだけずるい！瞬先輩とラブラブで！！」

「ごめんなさ〜〜い」晴海わざとらしく言った。

「もうっ！お姉ちゃんったら！！」

駅に着くまでの数十分間、城ヶ崎姉妹のじゃれあいを僕は黙って見ていた。

駅に着いたら正面のロータリーに黒塗りのプリウスを発見した。すると健之助さんが後部座席のドアを開けて

「晴海お嬢様、清海お嬢様、お帰りなさいませ。」

「あっ、健之助さん、お疲れ様です。わざわざありがとうございます。」

「いえいえ。…あ、瞬様もお乗りください。送って差し上げます。」

「あっ、ありがとうございます。」

その日は送ってもらい、家に帰ってお風呂に入り速攻で寝た。

多分布団に入ったのはころにはもう日付が変わっていたかなあ？

## 第6話 サプライズのその後

「瞬、今からファイトねえ」

晴海からメールが届いた。

本日は月曜日。

この日は「こんにちは、みなさん」略して「こんみん」の収録日だった。

この番組は最近話題のことについてのトーク番組だ。

僕は赤西海斗（あかにしかいと）として番組に参加している。

「ありがとう」「短く返信をした。

「赤西さん。そろそろお願いします。」携帯をかばんにしまったらスタッフが僕のことを呼びに来た。

「はいっ」短く答えてから楽屋を出た。

「本日もお疲れ様でしたあー！ー！ー！」

スタッフの一人が番組の収録が終わったことを告げた。

僕は毎日出演者の中では最後にスタジオを出ることにしている。

出入り口の前で一人一人に挨拶をしてからスタジオをでる。

ガチャッ！

楽屋のドアを開けた。

靴を脱いで上がり、机の上の上にあるミネラルウォーターを一気飲みした。

「はぁ…」ため息を一つつく。

「あつ、海斗君。今ため息をついたね。幸せが逃げちゃうよあ〜」  
26歳で、マネージャーの井上まなみさんが言ってきた。

「そんなことないでしょう…あつ…!!」

「あらら。携帯の電源が切れたんだね。ため息をついたからよ。」

「いいえ、昨日の夜充電してなかったんです。彼女とデイズニール  
ンドに行つて帰ってきたの12時ですよ?」

「あれ?海斗君つて彼女がいたんだ。意外に優しいのね。」

「あはつ、そうですかね?」

「そうよお。私の彼女なんてちつともかまってくれなくて…」

「それはなんともいえないですね。あつ、充電していいですか?」

「ええ、どうぞ。その間に軽い打ち合わせをしましょう。」

「はい。」

それから2時間。

まなみさんと仕事のことやまなみさんの恋愛相談も受け、自分のこ  
とも話した。

結構悩んでいるようすなあ。

「じゃ、お疲れ様でした。」

「お疲れ様。気をつけてね。」

まなみさんに頭を下げてから楽屋を出た。

局を出て電車に乗っているときに携帯を確認した。

時刻は10時になったばかり。

まだかけても大丈夫かな…、と思いながらもかけてみることにした。

「プルルルル〜プルルルル〜プル〜ガチャ…はい?」

「あつ、瞬だけど電話した?」

「うん。あつ…そ、その…だ、大好き。」

「へ?」

「だから…っでもう言わないよ!!」

「それを言うために電話をしたのか？」

「だって8時には収録終わってるでしょ？」

「そのあとマネージャーと打ち合わせをしてたんだよ。」

「そうなんだ…じゃ、また明日ね。」

「うん。俺も好きだからね。」

「もうっ！バカッ！」

「じゃね。」

電話を切った。

意味がわからないがでもなんだかうれしい。

多分、今日何かあったんだな。

明日にでも聞いてみようかな。

次の日…

「おはよあ…」

僕はいつも通り学校では大人しい感じを出していた。

それとは対照的なのは…

「おっつはよあ〜〜！」城ヶ崎晴海。

「あつ、晴海。おはよ〜。ねえ聞いてよ。昨日『こんみん』のス

タジオ観覧に行ったよ！」

「えっ、本当に？どんな感じだった？」

「あの赤西海斗さあ、結構性格悪いとか言われてるじゃん？でも、

絶対そうじゃないことが分かった。」

瞬は一瞬背筋が凍るような感じがしたが、すぐにそれはなくなった。

「なんで？」

「それがさあ、私、観覧車席に忘れ物してさあ、取りに行ったわけ。もちろんスタッフと一緒にね。そしたらちよ〜ど出演者がスタジオから出て行くところだったの。そしたら出入り口のところで一人一人に挨拶してて、誰もいなくてからスタジオを出てたのよ。あれ

は本当の優しさね。」

こう語っているのは自称赤西海斗ファンの黒澤あかりだった。  
こういうファンがいるのは正直うれしい。

「えっ？そういうことするんだあ。じゃ、やっぱりいいやつなんだね」

晴海の言葉に周りにいた女子が同意を示した。

なぜか、晴海の視線を感じたので晴海のほうを見てみるとアイコンタクト会話をした。

「（よかったわね。結構人気で）」

「（ああ。おかげさまで）」

アイコンタクト会話終了！！

HRの開始を告げるチャイムが鳴ったので会話はそれで途絶えた。

それから1ヶ月間は仕事も学校生活も難なく過ごせた。

## 第7話 学年レクリエーション？

今日は秋真っ只中の9月の中旬のある日の朝。

「瞬！！起きなさいー！今日レクリエーションでしょ？」

母の叫びで僕は飛び起きた。

今まですっかり忘れていた。

今日は学年レクリエーションの日だ。体育祭のミニバーションだ。

まず、男子はサッカーをして、

女子はドッチボールそのあと決勝戦を行い、優勝を決める。最後にクラスでリレーをして終わり。

リレーは全員参加なのだ。

朝ごはんを飲み込むように食べ、服装は完璧でないまま、体操服だけをかばんに突っ込んで大急ぎで家を出た。交差点を曲がって一時走っていたときのこと。

プップー、プップー

車のクラクションが聞こえた。口にジャムを塗った食パンをくわえながら素の姿で振り向いた。

その車は黒色のプリウス。つまり、城ヶ崎家の車だった。

「伊崎瞬……早く乗れ……！」

城ヶ崎晴海が車の後部座席の窓から顔をのぞかせて叫んでいる。

叫び終わるころにはもう、僕の横に後部座席のドアがあった。

「おい、その少年！乗りな！遅れんぞ！」

晴海は少しボーイッシュな感じで話してきた。

「え、えっ？晴海さんですか？いつもと感じが違いますね。」

「それは置いといて。ってか早く乗ってよ。時間がぎりぎりなの。」

「あ、はい。」そういつて僕は後部座席のドアを開けて車に乗り込んだ。ただいまの時刻7時45分。ここ

から車で5分。歩いて15分。走って10分。

車内は静かだった。だって晴海は隣で寝てるんだもん。まあ、寝顔も可愛いものだ。そういえば半月前、学校で「美少女コンテスト」があつてその1位が晴海だった。そして2位はまさかの清海。姉妹で1位と2位を独占してしまった。そのあとは2人に対する告白ラッシュだった。1日平均3人。それが1週間ぐらい続いた。かるく20人は超しているのだ、姉妹だからその2倍。一応カメラに収めて置こうつと。

パシヤ！

「……はっ！瞬！今何した!？」

「いいや、な、なにも？ほら、外の花がきれいだったか——」

「嘘おつしやい!!！」僕が言葉を言い終わる前に晴海の声が入った。

「えっ…あ、あああ…」

答えに詰まっていると前の席のほうから声がした、健之助さんだ。

「お嬢様、瞬様。学校に着きましたよ。時間がぎりぎりなので急ぎください。」

「あ、ありがとうございます。ほら、晴海、行くよ。」

なぜか晴海は動こうとしなかった。拗<sup>す</sup>ねているのだろうか。

「ほら、晴海——行くよ。」

「……うん。」

ああ、やっと動いてくれたよ。車から降りて、車が立ち去るのを見送っていること

「瞬——！遅刻しても知らないからね——!」

晴海が玄関の前で叫んでいた。あれ？いつのまに？さっきまで隣に

いたのに。

「いつそうちに行ったんだよ……!?」

キーーンコーーンカーーンコーーン

やばっ……!!

こりゃ、遅刻だ!

あつ、今日はHRの開始時間が10分遅い! 8時10分まで更衣の時間だった! 安心だ。

さあ、早く教室に行つて着替えなければ!

## 第7話 学年レクリエーション？（後書き）

感想をお願いします。

最近ほかの方の小説を読んでいると自分の小説の内容が薄く感じます。

皆さんのアドバイスをください。

本当に最近悩んでいますのでよろしくお願いいたします。

## 第8話 学年レクリエーション？

ドタドタドタドタ……ガラガラバンツ！ ハアハアハア……

思いっきり走ったから息が切れていた。こんなに走ったのは久しぶりだ。今日は学年レクリエーションというのに……遅刻！！

クラスでは男子が着替えていたのだが、全員が僕を注目していた。体育服のズボン履きかけのやつもいれば、上の服を着ている途中のやつもいた。しかし、その輪の中に一人だけおかしなやつがいた。女？えつまさかここに女がいる訳ないよね……いやっ、やっぱり女や！！しかも晴海！！

まあ、無理はないか。僕とそんなに時間が離れてないしね。教室に荷物を置いて今から着替えに行くところだろうか。晴海は周りで男子が着替えてるのになんとも思っていないのだろうか。すげえ根性してやがる。

「あつ、瞬じゃん。おそいね。」

「いや、あなたと一緒に来ましたが……いえ、連れてこられましたか……」

「ま、そうやね。じゃ、あとで。」  
「そういつと晴海は教室を出て行った。」

「瞬、お宅ら付き合ってるん？」  
「関西から引越してきたという南海拓斗が聞いてきた。」

「そんなわけないじゃん。第一、あんな人が俺のこと好きになるわけないでしょ……」

「まあ、せやな。」

「そこ肯定されたらへこむわあ。」

「すまん。でも、最近瞬って積極的になったよな？」

拓斗の呼びかけに周りにいた男子がうんうん、とうなずいている。

「まあ、幼馴染ちゆうことも関係してるやろうけどな。でも、羨ましいなあ。あんなやつと幼馴染なんて。」

それがそうでもないんです。心の中で晴海の顔を思い浮かべながら思った。

「ごちゃごちゃ言いながらも、何とか更衣を済ませた。」

あと、2、3分ほどでHRは始まるだろう。それまで読書をして過ごそう。

それから5分後。担任の杉野先生が教室に入ってきた。

「はい、みんな席に着けー。女子入れていいか？よし……おい、はいれ。」

先生の声の後前後のドアが開いて女子がどんどん中に入ってきた。

「よし、全員そろってるな……ってあれ？城ヶ崎は？」

「まだ、着替えてると思います……あつ、今来ました。」

窓側に座っている女子生徒が廊下を見ながら言った。

ドタドタドタ…ガラガラバンッ！

「遅れましたあー！」

晴海は僕が朝来たときと同じように息が上がっていた。

「まあいい。早く席に着きなさい。」

そついった先生に晴海は軽く礼をして自分の席に座った。なんだか恥ずかしそうな表情をしている。

「はい、今日は皆さんもご存知の通り、学年レクリエーションです。思いっきり楽しんでくださいね。くれぐれも怪我はしないようお願いします。ほかに連絡がある人はいませんか？…いませんね。でわ、終わります。」

「起立！気をつけ！ありがとうございました！」

学級委員長の西畑君が号令をかけた。

今日は1時間目からさっそくレクなんだ。サッカーね。苦手じゃな

いんだけどね。1回何かの番組でフットサル対決をやったことがあったっけ？まあおいといて。今回は勝とうじゃないか！

決意を胸に靴紐を結びなおしてから教室を出た。

## 第9話 学年レクリエーション？

「絶対勝つぞー！ー！」

『オーーー！！』

いよいよ学年レクリエーションが始まる。

僕たちは緑色のゼッケンをつけてサッカーの初戦を迎えようとしている。相手は猛率いる2組。猛は小学生のときはずっとサッカーをやっていた。僕も一緒にサッカーチームに入ってプレーしていた。僕的には猛のほうが上手いと思っているのだが、本人はあまり自分の上手さに気がついていないようだ。

「両チーム、整列！」

審判役の2組の担任の先生が言った。僕の目の前には猛がいた。かなり闘志を燃やしているようだ。

「それでははじめます！礼！」

『お願いしまー！ーす！』

僕はちょうど目の前にいた猛とよろしくの握手を交わした。言葉は発さなかったものの、ものすごく張り切っているようだ。

「それではいきます。プー！ー！」

先生が試合の合図を告げる笛を鳴らした。鳴らした瞬間に応援していた1組の女子が「キャー！ー」と声を上げた。女子はどうせ、誰

がどんなことをするかを見ただけなのだろう。口々に男の子の名前を出している。

……

「ピッピッピ……！」

試合の終わりを告げるホイッスルがなった。結果は僕たちの圧勝だった。5 - 0。

猛は案の定、肩を落としていた。

『ありがとうございます……！』

御礼の挨拶をしてベンチになっているテントに入った。すると女子が前に一列にならんで

「男子のみなさんお疲れ様でした。次は女子だから応援よろしくね。」

「そういつて頭を下げてきた。はつきり言って「はいはい。」って感じだった。」

「瞬、お疲れ様。2点も決めるなんてすごいじゃん。」

この試合は2ゴール2アシストの活躍だった。

「お前は俺が小学校のころサッカーしてたのを覚えてないか？」

「あああ、そういえば習ってたね。」

「試合になつたら必ず見に来てたくせに。」

「まあ、それは変えられない事実だね。でも、あんまりはしゃぎすぎないでね。怪我したら収録とか大変でしょ?」

晴海は最後の一文は声を落としていった。幸い周りの誰にも聞こえていないようだ。

「心配すんなって。俺の体はそんなにぼろじゃない。」

「確かに。私ドッチボール頑張るから応援しててね。」

「もちろんじゃん。好きだよ。」

走り去りゆく晴海の後姿に言った。

「バカっ!」

顔が真っ赤になりながらも、何とかごまかそうとしていた。

人に注意しながら晴海はそのあとの試合で突き指して指に包帯をぐるぐる巻きにされた。

なにやってんだか…

## 第10話 学年レクリエーションとそのあと

「本日はまことにお疲れ様でした。帰ったらマッサージをしっかりと筋肉痛にならないように。以上！」

僕たちの学年レクリエーションは校長先生の挨拶で幕を閉じた。

こんだけ動いて筋肉痛にならないようにって言うほうが無理だろう。校長が言っても説得力ないっつーの！思わず、そう思ってしま

う。

「おい、瞬。校長をバカにするな。」

隣に並んでいる猛が声をかけてきた。

「なんでそんなことを言う？」

「お前、心の中でそう思ってただろ？」

「……………凶星だ。」

「ほらな。」

おい、こいつはエスパーなのか？いつからそんな能力を持っているんだ？俺にも分けてくれ。

そうこうしてる間に学年レクリエーションの閉会式は終わった。

順位的には1位から5位まではクラス順だ。

つまり1位1組、2位2組、3位3組、4位4組という結果だ。

僕たちは優勝の喜びを抑えることができずに、着替えをしているときもおかしなことになっていた。

なぜか知らないが、靴下が宙を舞い、体操服が宙を舞い、パンツまでが宙を舞っている。

すると着替えてる最中にドアがゆっくりと開いた。

みんなドアが開く音がすれば一気に静かになり、ドアに注目する。

すると恐る恐る学級委員の西畑君が遠慮気味に教室に入ってきた。

「あ、そんな見ないください。こ、怖いですよ……みなさん、これどこに飾ります?」

西畑君の背中から取り出されたのはなんと優勝トロフィーだった。

これを見た瞬間男子がまた雄叫びを上げた。

残念ながら僕はまだこういうのにはついていけない。おそらくみんなからはKYだと思われるだろう。

「みんなごめん。今日は用事があるから先に帰ります。」

そういうと男子の目が殺気立っていた。

「（おい、瞬よ。そいつはないぜ）」

「（お前は本当にKYだな）」

「（せつかくなんだから喜ぼうよ）」

みんなの目がこういつていた。

でも、みんなは違った言葉をかけてくれた。

「おう、わかった。がんばりいや。」

こいつはもちろん南海。こいつの大阪弁は結構好き。聞いているだけで落ち着く。

「じゃ、また明日。」

「おう。ほなな。」

僕は教室を出た。

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

下駄箱で靴を入れ替えていたときに向こう側からとても騒がしい声が聞こえてきた。こんなときに大声で話しているのはきつとウチのクラスの女子しかない。

そんな女子たちの会話。

「私たちがめっちゃ強かったね。っていうか晴海いゝ。指大丈夫？」

「まあ、なんとか。でも結構突き指って痛いんだね。今びっくりなう。」

「晴海ってそういう冗談言っ子だったっけ？」

「ええ。入学してからずっと変わってないでしょ？」

しばし演技にお付き合いください……

「いいえ、あなたは大人になったわ。晴海ちゃん。」

「ほ、本当ですかお母様？」

「ええ、私にはそう見えるわ。晴海ちゃんあなたは恋をしているのではありませんか？」

「いいえ。そんなことはございませぬお母様。」

「ほう、そうですか。……って、あー！あんなところに瞬がいる！」

「え、どこどこ？」

「っっている訳ないでしょ……あっ！あんなところにガチで伊崎瞬！」

「えっ？俺がどうかした？」

彼女は冗談で言ったつもりだろうが偶然にも指の先に僕は立っ

ただ。でも、本気で探す晴海もバカじゃないのか？っていうか晴海まだ固まってるし……

「ご、ごめん！伊崎君！ほ、本当に冗談のつもりだったの。」

「あ、分かってるよ。気にしないで。」

「うん、ありがとう。でも、この子はどうしたらいい？」

その女の子が指をさした先にはまだ固まったままの晴海がいた。すると別の女の子が言った。

「でも、本気で探してたよね。ってもしかして、もしかしちゃったりする？」

「しないっ！」

晴海のフリーズがとけ、開口一番にこう叫んだ。

「ま、晴海、落ち着いて……」

晴海は友達に急かされ、教室へ続く階段を上っていった。

そして靴を履き、いよいよ歩き出そうとしたそのとき！

また後ろから声をかけられた。

「瞬……」

## 第11話 学年レクリエーションとそのあと？

「瞬……」

僕は靴をはいてさあ、今から帰ろうとしているところに声をかけられた。僕を呼び捨てにするのはクラスメイトの何人かぐらいだ。でも、今の声はどう考えても女の子だった。ってことは晴海か。

「なに？……えっ！清海？」

そう、声の主は清海だった。でも、さっきの声の主は確かに晴海だったはず……でも、よく見ると俺より背が低いから確かに清海だ。

「どうしたの？清海？」

「歩きながら話していいですか？」

「うん。」

気まずい……気まずい……この感じ何かのときに感じたのと一緒に耐えられない……

「あの、話して？」

「あ、あの、伊崎先輩これからどこへ？」

「あ、家に帰ってちょっと色々……」

「テレビ局ですか？」

「なんで？」

こいつなんか絶対に知ってる。気を緩めたらいかん。

「だって伊崎先輩よくテレビ局に出入りしてますよね？」

「人違いじゃなくて？」

「だって私、失礼ですけど、後をつけたんです。」

こいつ！何てことしゃがる！！あれだけ出入りは慎重にしてたのに…

「……………」

「べ、別に先輩を脅してどうするとかじゃないですから。」

「どうしたい？」

やばい！ちょっと怒ってるのが自分でも分かる。少し清海がびくっとなったのはすぐに分かった。

「赤西海斗ですか？」

単刀直入だな。これって俺から言った方がいいのか？晴海に頼もうかな…………

どうしよう…………

## 第12話 清海の後遺症

「赤西海斗ですか？」

その言葉がさつきから何回も頭の中に響き渡る。耳のすぐ近くで言われているようにすぐリアルに聞こえてしまう。結局清海に質問されて答えるのを渋っていると清海のクラスメイトがこっちに歩いてきて、清海に気づいたので、一緒に帰っていった。そして去り際に「バラしてほしくなければ、私と付き合ってください。」と言われた。僕は数分間は動くことが出来ずにそこに呆然としたまま立っていた。そしてなんとか家に帰り着くことが出来た。

その日は帰ってから何もする気が起きず、結局収録も体調不良といって休みんだ。なので早めに就寝することにした。

\*\*\*\*\*

翌日。

今日は火曜日。でも、2年生は昨日のレクリエーションの疲れを取るために休みになった。そのことは今朝、携帯を開いて晴海からのメールで知った。どうやら送信したのは僕が寝たすぐ後だったようだ。どうやら、レクリエーションに一生懸命になりすぎて、足を負傷した人が多かったからだとか……そんなわけで、引き続き何もやる気がおきないが、何とか振り切って午前中は乗り切った。

午後は暇で仕方なかった。そこで誰かと暇つぶしにメールでもしようかと思い、携帯の連絡帳を見ていると城ヶ崎晴海のところまで目が止まった。すぐさま晴海にメールした。

<今暇ですか？>

すぐに返事が来る。晴海のいいところの一つ。返信が早いところ。

<暇だよ。>

晴海が暇というときは本当に暇なときらしい。どうせ晴海のことだからもう、午前中のうちにその日の宿題のノルマは達成しているだろう。メールで話をするより、直接会って話したい。

<近くの公園で会って話したい。出てきてくれるかな？>

<いいよ。>

僕は5分後には公園にっていた。その2分後に晴海は着いた。平日のお昼だからであろうか。人は僕たちしかいない。2人で近くのベンチに腰掛けた。

「実は相談があって……晴海ちゃんのこと……」

「清海？清海が何かしたの？」

そして僕は、晴海に清海にされたことをすべて話した。最初のほうはちゃんと聞いていたものの、途中から表情が暗くなり始めた。

「……そして別れ際に『ばらしてほしくなければ私と付き合ってください』って言われたんだよ。」

ここを言ったら晴海の顔が真っ赤になった。これは照れではなく怒

りの表情だとわかった。

「あの、清海め…今日こらしめてやる!」

「ちよ、そこまで怒らなくていいよ……俺は別に清海ちゃんを責めてるわけじゃなくてどうしたらいいのかなって……」

「こればかりは難しいね。瞬はすこし特別な立場にいるもんね。逆にみんなに知らせるって言うのはどう?」

「俺が赤西海斗って言うことを?」

「そう。」

そう、って簡単に言いますが、それは絶対に無理だと思います。それをうちのクラスの女子が知ったら、とんでもないことになりますよ。僕の学力が落ちますね。確実に。毎日サインを求められるでしょうから。そういうのになりたくないために最初から隠していたわけですよ。

「でも、うちのクラスの女子ってそれを知ったらどうなるが行動の予測が出来ないんだけど……」

「毎日サインを求めてくるでしょうね。逆にもらってきてとか。」

「そうになると勉強に集中できなくなるんじゃない?」

「たしかにそうね。でも、それも一つの方法だと思う。方法って言っても最終兵器みたいな感じだと思っよ。」

「わかった。考えてみるよ。」

そうは言ったものの、みんなに本当の姿を明かすわけには行かない。これだけはどうしても避けたい選択肢だ。

「清海のご事は任せておいて。私が何とかするわ。」

「ありがとう。助かるよ。」

本当に晴海はいいやつだ。彼女としても女の子としても相談相手としても親友としても。

その日はお互いのことを話し、次回のデートの約束を立てた。この前がTDLだったから今度はTDSに行くことになった。

明日は1日学校を休まなければならない。

明日は特番の収録だ。

人気アイドルグループの山風とゲームをして対戦する「VS山風」という番組の2時間SPの撮影だ。僕は今度始まるドラマの共演者たちと出る。

その共演者の中にはまだあったことがないのだが、僕と同じ年の女の子が出るそうだ。

台本を読む限り、結構一緒に撮影をする時間が長そうだ。どんな人だろうかと興味がわく。明日になれば会えるのだ。このようなことを考えていると清海のご事は頭から一旦は離れる。今のうちから仕事モードに切り替えていかなければならないから。

「晴海、今日はありがとね。わざわざ。」

「いいえ、とんでもございません。こっちこそ清海がごめんね。」

「うっん。晴海が謝らなくていいよ。それより明日仕事だからお先に失礼します。」

「うん。がんばってね。」

「ありがとう。」

そういつて僕は公園を後にした。彼女より先に帰るのは失礼だと思っただけ、晴海はそこら辺のことは気にしなくていいといっくれたのでありがたい。

さあ、明日のために気持ちを切り替えていこう！  
そう誓ったときのことだった。

「YOU GOT MAIL」メールが来たことを知らせた。相手は晴海だった。

<伊崎先輩へ。今日は失礼なことをしてしまつて大変失礼いたしました。心よりお詫び申し上げます。私はおねえちゃんの話しを聞いて、先輩のことを応援することにしました。なのでこれからもがんばってください。 清海 >

晴海の携帯から清海からのメールが来た。これで許さなかったら可哀想なので

<ありがとう。その気持ちは嬉しいです。今度サインでも書いてあげますね。 >

と返事をした。この件はなんとか収まったようだ。僕は安心して眠ることが出来た。

### 第13話 初対面の同い年女優

今日は僕自身、待ちに待った「VS山風」の収録だ。確かにこの収録自体も楽しみではあるのだが、もう一つ楽しみなことがある。

それは同じ年で今度共演する女優さんに会えるからだ。なぜか同い年なのに敬ってしまう。

実は名前も知らないんだよね……

そんな僕と彼女が出会ったのは収録前の楽屋だった。

僕はドラマの共演者の方々と楽屋でくつろいでいた。くつろいでいたといっても周りには大先輩方たちがいらしゃるのでくつろげるわけもないが……

でも、楽しくお話しをしていた。結構今回はみんなさんと早く打ち解けることができた。こないだの雰囲気なのは初めての経験だった。でも、僕が一番年下で経験も浅いので結構気を使う。そしてまだ姿を現さない彼女について話していた。

「あの、大河内さん。僕と同じ年の女優さんが来るって話しなんですけど……。」

「ああ、その子ね。どうかしたのかい？」

「実はまだ会ったことがなくて……。実は名前もまだ……。」

「ああ、そうなのか？それはいけねえ話した。今日来る子は高橋いつきちゃんだ。まだ若いのに結構長いことやってる。そこに居る木嶋と同じくらいやってるはずだ。なあ、木嶋？」

「あつ、いつきちゃんですか？確かに僕と同期っていえば同期かもしれないですね。」

「ちなみに木嶋さんは何年このお仕事を？」

「え〜つとね……確か先月で5年たったかな？」

「5年ですか！長いですね……僕なんてまだ1年ちょっとです……」

「そうなのか！？まだそんなに短かったんだな。それにしてもいい演技するよね。」

「あ、ありがとうございます。大河内さん。」

「礼を言うのはまだ早いぞ。」

「あつそうですね。」

「「あつははははは」

楽屋内に笑いが起こった。僕たちはいつも和気藹々（わきあいあい）とやっているのだ。

そうしているときに楽屋のドアがノックされた。

「なんだ？もう出番か？」大河内さんがぼやく。

「失礼します！」

それは若々しい女の子の声だった。この子があのうわさの高橋いきちゃんか……なんか変に緊張するな……

ドアを開けたその先にたっていたのはすごくイマドキの女の子だった

た。

僕と同じ年なら中学2年生か。それにしても本当に中学生には見えない。おそらく高校2年生に見えてもおかしくない。クリクリ二重の目。髪は真つ黒でショートカット。おそらく身長は僕と同じくらい少し高いぐらいだろうか。清潔感あふれる洋服を見事に着こなせている。スタイルもいい。だからといって胸はないわけではない。おそらくだろう。……って俺は何を考えてるんだ。おいっ！ま、男だから仕方がないっちゃんあ仕方がないよね。僕はもう一度顔を見してみた。

「初めまして。あなたと同じ年だと聞いております。赤西海斗で……えっ！」

「どう、どうしたの？海斗くん？」マネージャーの井上まなみさんが聞いてくる。

「どうしたも、こうしたもないですよ。どこかで見たとあると思ったら同級生ですよ！しかも同じクラスですっ！」

「ええっ！……！」

楽屋に居たすべての人が驚きの表情だ。隠しきれていないようだ。

「おやつ、海斗くん、いやっ、瞬くん気がついたようね。」

「気がついたも、くそもあるかって！何でお前がここに居るんだよ？」

「あら、口が悪いのね。学校と全然雰囲気違うじゃん！」

「当たり前でしょ！で、何でここに居るんだよ！」

「えっ？だって今日『VS山風』の収録でしょ？私出るし。」

「まじで！噂の同じ年女優ってお前のことだったのかよっ！」

「そうだけどなに？そんなにいけないこと？」

「……ち、違うよ。ただ驚いてるだけ。」

そこに割り込むように木嶋さんが入ってくる。

「ちよっと2人も。仲がよすぎじゃないの？学校でもそんなに仲がいいの？」

「いいえ。あんまり仲良くないですし、だからといって嫌いじゃないです。」

「僕も同じです。」

「なるほどね。高橋さんはこの名前は本名？だって海斗君の本名は伊崎瞬でしょ？いつきちゃんは？」

私の名前は……

## 第14話 同じクラスのあいっだったとは……

「私の名前は……川？いつきです。」

「やっぱりね。って下の名前は『いつき』だったんだ。初めて知った。」

「失礼ね。……あっ、大河内さん。よろしくお願いします。」

「おお、よろしくなあ。どこかの海斗くんたちがつてしっかりできてるお嬢さんだ。」

「『どこかの海斗君』って僕しかいないですよね。」

「おおそうじゃったな。あはははは。」

「あはははは。」

また楽屋内で笑いが起こった。大河内さんをはじめ、結構お笑いが好きな方が多くて、こうやってみんなが集まったときにはすごく騒がしくなる。ドラマの撮影を始める前に「本読みというのがあるのだ、そこでもみんながお笑いの話をしていて、全然台本を読めなかった。でもやるときはやる、そんな集まりだった。

今回のドラマは、刑事ドラマである。コンセプトは「今までに見たことがない刑事ドラマ」というものだ。たいていの刑事ドラマは実際の警察とは違うことをしていることのほうが多い。まったく一緒というのは極めて少ないのだという。そういう点を解消したのが今回のドラマ『PS・ポリスストーリー』だ。

今回のドラマの撮影のために共演者みんなで実際に警視庁を見学した。僕は初めて警視庁に入ったので、驚きがいくつもあった。まずは、取調室。よく皆さんが想像するのは、真ん中に机があつて、その上に電灯が置いてあつて、端っこの方に記録をつける人の机があるというようなことを想像する方が多いことだろう。しかし、実際はそうではなかった。ただ真ん中に机があつて向かい合つて座れるようになっているだけであつた。もちろん、どんぶりものなどは食べることはできない。本当にそれだけの取調室だつた。なぜかといつたら、凶器になりうるものは絶対に置かないということだつた。

すこし、説明が長すぎたが気にせずにいこう。

いつきが到着してしばらくたつてからまた楽屋のドアがノックされた。

「コンコン！失礼します！」

そこにたつていたのは今日対戦するアイドルグループの『山風』だつた。山風は幅広い年齢層からの人気が高い。とくに10〜30代の女性に人気が高い。それぞれ、ソロでもドラマに出ていたりするのでよく見かける。そんな5人が挨拶に来た。

「本日はよろしく願います。手加減はしませんからね。」

「ああ、わかつておる。なあ、いつきちゃん？」

「ええ〜。私負けたら泣いちゃいますよ？ねえ、お兄ちゃんたち少しは手加減してね（はあと）？」

いつものいつきのメロメロ甘える攻撃が炸裂した。メンバーの一人

である松田くんが答える。

「そんな目で見られたら……手加減しちゃうかな!？」

「おいつ、調子に乗るなつて。」

メンバーである藤宮くんが注意をする。

「まあ。そういうところです。それでは失礼します。」  
リーダーである大森くんがそういつてメンバーを引き連れ楽屋を出て行った。

「これだから人気があるんですねえ」

興味深げにまなみさんがいった。

「「「どういうことですか?」「」」

思わずいつきとハモってしまい、顔を見たらいやな顔をしていた。かまわず、まなみさんは続けた。

「ああやってリーダーがちゃんとしてれば大丈夫なんですネ。それとほかのメンバーもこういう時にここまでは冗談言っていないけど、ここから先はだめつていうのがわかっていているからなのね。」

まなみさんは一人合点しながら説明していた。

「「はあ……」「」

ここでも思わずハモってしまう。

「大河内さん、いわれちゃってますよ?」

「今のは私に言っていたのかね?井上君?」

「い、いいえ。山風についてですよ。」

「ほらみてみなさい、木嶋。」

「でも少しは大河内さんに向かって言っているように感じたんですけどね……。」

「まあ、少しはね。」

そういつてまなみさんは大河内さんに向かってウインクをした。

またまた楽屋内がにぎやかになった。すると隣にいたいつきが僕に話しかけてきた。

「ねえ、ここっていつもこんな感じなの?」

「うん、賑やかだよ。そのうち慣れるんじゃない?」

「そうなるといいけど……」

「大丈夫だよ、いつきなら。心配ないって。」

「ありがと。……あつ、収録終わったら少し時間くれない?」

「どれぐらいかな?あんまり長くは取れないけど……」

「わかってる。30分でいいわ。」

「わかった。」

そう話していると3回目のドアをノックする音が聞こえた。

「コンコン！失礼します。すこし事前の打ち合わせをしてもよろしいでしょうか？」

「ああ、いいとも。入りなさい。」

「失礼します。」

この番組のADである近藤さんが入り口に靴を脱がずに立てひざを ついて説明を始めた。

「今回、みなさんは、山風の対戦相手です。最初のオープニングは山風が少しトークをしますのでまだ、入り口のほうでお待ちください。そして櫻木くんが『今回の対戦相手はこの方々です！どうぞ！』といったらスモークが噴射されますので少し弱まってから大河内さんを先頭として山風がいるところまで走ってください。そして横1列に並んでいただき、そこで軽くトークをしていただきます。そして10分のセツティングタイムをさみまして。その後からゲームをスタートします。ここで以上ですが、何かご質問はありませんか？」

「ちょっといいかね？」

大河内さんがゆっくりと手を上げた。

「はい、なんでしょう？」

「あんたは年寄りを走らせる気かい？」

「えっ、あ、あのお……そ、それは……」

近藤さんが答えに困っているとまなみさんがすかさずフォローを入れる。

「あら、私はそんな年寄りなんて思ってませんよ？逆に走ったほうがいいかも、ですよ？」

「なんでだ？」

「もし走っていったら『大河内さんいくつになってもお元気ですね』なんて言われたりしちゃうかも、ですよ？」

「なるほどなあ。そういうことか。おい、近藤。そこら辺山風のように話をつけといてくれ。」

「了解しました。そろそろお時間なので皆さんスタジオのほうに移動していただけますか？」

「おお、わかった。おい、みんな行くぞ！」

「「はいっ！」「」

みんな重い腰を上げ始めた。でも、となりのいつきは座ったままだった。

「ど、どうした？」

「わたし、いつも収録の前になると足に力が入らなくなるの。」

「そんなことなら早く言えよ。はいっ……」

僕は手を差し出した。するといつきはこっちを見上げてきた。

「あ、ありがとう。優しいのね。」

「別に。それより早く行くこっぜ。」

「う、うん。」

いつきは恥ずかしそうにしているが気にしないことにして、手をとって楽屋を出た。

さあ、手加減なしで戦おうじゃないの！

第14話 同じクラスのあいっだったとは……（後書き）

ここで登場人物の確認をしておきます。

主人公は伊崎瞬。瞬くんの芸名は赤西海斗。

瞬の恋人の城ヶ崎晴海。妹は1学年したの清海。

そんな城ヶ崎姉妹の運転手は健之助さん。

僕たちのクラスの学級委員の西畑君。

僕の親友の猛。

そして僕のマネージャーの井上まなみさん。

ドラマの共演者で長い間俳優をやっている大河内さん。

その、弟子的存在の木嶋さん。

そして僕と同じ年の女優の高橋いつき。本名は川？いつき。

山風のメンバーは

大森くん、藤宮くん、松田くん、櫻木くん、千葉くんの5人

とりあえず、思いつく限りこれぐらい

## 第15話 収録後……

「はあく疲れた。こんなに激しい運動をしたのは久しぶりじゃな。」

「でも大河内さん、すごい活躍でしたね。」まなみさんが言う。

「そういつてくれると疲れが取れるよ。」

「すげー、まなみさん超能力者じゃね？言葉一つで疲れを取るって

……」僕はわざとぼけてみた。

「言葉のあやじゃよ。」

「ですよねぇ？」

「俺のポケがスルーされてる……」

『あつはははは』

この会話は収録終了後の楽屋での会話。みんな機嫌がいいのだ。なぜなら今日の勝負に見事勝利した。

5つのゲームで争ったのだが点差がなんと200点もあいてしまった。本当に大河内さんの活躍はすごかった。僕も負けてはいませが

……

そういえば、ロッククライミングしながらボタンを押して点数を稼ぐゲームがあったのだが、そのゲームになぜか僕といつきの2人で参戦することになった。大河内さんの指名だから断れないね……

OAは来週の水曜日だ。僕のことには気づかないにしろ、いつきのことはばれるだろう。学校でもなにかしら変装してるわけでもなく、芸名と本名のしたの名前が一緒なのだから、黒澤あたりが気づくんじゃないの？

そう考えていると突然話しかけられていることに気がついた。

「……ん」

「……」

「瞬！」

「はいっ。どうかした？」

「どうしたじゃないでしょ。話がある。先に帰ろう。瞬が言って。」

「はあ？そんなの自分で言えよ。」

とは言うものの、内心うれしい気持ちでいっぱいだった。なんかいつきに少し甘えられているだけで心臓がバクンバクン言っている。

「はあ、わかったよ。……大河内さんすみません。お先に帰ってもよろしいでしょうか？あっ、いつきも一緒です。宿題がやばくて…」

「…」

「なあに、そんなことか。ま、今日はいいとしよう。でも、海斗。宿題はなるべく早めに終わらせておくようにな。」

「はい。ありがとうございます。ではみなさん、お疲れ様でした！」  
『お疲れ様』みなさんに了承をもらった僕らは楽屋を出た。  
いつきつたら僕が話している間はずっと目をキョロキョロさせていた。小さい声で「お疲れ様でした」と言っただけであった。

\*\*\*\*\*

そんなこんなで僕たちは今駅前のカフェにいる。  
夜も遅めなのに中学3年生がこんなところにいるののかなと思いつつも、いつきの話に耳を傾ける。

「……ねえ、伊崎くん、どうしたらいいかな？」

「えっ？あつ……ごめん。聞いてなかった。」

「それ、男として最悪ね。」

「まあ、そうだけども……ってかいつきってそんな性格だったんだね。意外に絡みやすい。」

「そう？あ、ありがとうございます……じゃなくて！」

少し顔が赤くなっていますよ？

「どうしたらカメラの前に立つときに緊張しないでいられるのって聞いたの！」

「ああ、なんかそんな感じだったね。っていうか僕も全く緊張してないわけじゃないんだよ？」

「え、でも……全く緊張してない様に見えた……。」

僕から見たらカメラの前だといつきのほうがカメラの前で緊張してない様に見えたんだけど……

「でも、大河内さんから緊張しなくなるようにちょっと教えてもらったことがあ  
るんだ。」

「えっなに？気になるんだけど……」

僕は大河内さんにまだ、テレビに出始めたばかりのころ言われたことをそのままいつきに伝えていた。聞きながら何かしら相槌を打つてくれるから話しやすかった。

だからいつきの返答を聞いた瞬間、「こんな人だったの？」と  
思ってしまった。

「なんか、難しい言葉がいっぱい分からない……」

「おい、それ本気で言ってるのか？これは小学4年生でも分かる説明をしたのに……」

「もつと簡単にして？おねがい」

「だから、自分が緊張するときはどうしても守りに入ってしまう人がいるから、なるべくそうついっ心捨てて、攻めの姿勢になれ。それから同じように攻めの姿勢の人の近くにいるようにしなさい。そしたら自然と緊張が解かれていく。って言われたの。」

それでもさつきよりは減ったが、まだ頭の上には疑問符が残っていた。

「なんか分かったような、分からなかったような……。」

「俺も意味はまだ分からない。でもそのうちに分かるようになるって。」

「ふうん。私には分かるときが来ないような気がするわ。」

「そういうなって……あつ、そろそろ迎えが来るから帰るね。あつ、お金は払っておくから。じゃ、明日。」

僕は机の端っこに置いてあった伝票を手に取り、そのままレジへ向かい、会計を済ませた。

さあ、明日から学校だ。気を引き締めて行きますか！

## 第16話 学校

少し遅めではあるが僕たちの学校の紹介をしよう。

まず、僕たちの学校のことを一言で表すと「広い学校」である。

この言葉が表すようにとてつもなく広いのだ。

僕たちが通っている学校は「宮乃原学園中等部」というところだ。中学、高校、大学一貫なのだ。中学受験さえすればそのままエスカレーター方式に大学までいける。

この大学も結構馬鹿にできない。日本で両手両足を使って数えてもその中に入っているような結構トップクラスの大学だ。

もちろん、中学、高校、大学とあるのだからそれだけ敷地がある。結構山奥と言えば山奥になるのだが山奥と言う感じがしない。この学園ができるにあたって開発されたベットタウンが学園の周りにはある。ここにいる人たちはみな、ここの地域のことを「山奥都会」という。それだけ開発が進んでいる。

そして学校はというと400メートルのトラックがある運動場が2つ、野球場が1つサッカー場が1つ、ラグビー・アメフト場が1つ、プールが1つ、体育館が2つ、弓道場が2つ、武道館が1つ、中学校校舎の生徒棟（4階建て）・管理棟（4階建て）・部室棟（3階建て）の3つの建物、高校も中学校と同じで、大学は生徒棟と管理棟がそれぞれ5階建てになっている。すべての校舎は渡り廊下でつながっている。それと中・高・大共同の学生寮が1つある。それと何と言っても図書館。図書館は図書室ではなく一つの建物として独

立している。ここにはほかの県などの県立図書館などにある本の冊数より多い蔵書数を誇ると言われている。

というように、とてもでかい学校だ。学校全体に1300人ぐらいの人がいると思う。

当然と云っていいほど迷子の人が出る。たとえば教室から理科室に行くのにも迷子になる人がいるぐらいだからだ。とにかく宮乃原学園は超がつくほどのお坊ちゃま、お嬢様学園なのだ。

あつ、あともう一つ。大事なことを忘れていました。学園内に普通に比べ規模は小さいもののファミリーマートがあります。食堂も別にあることはあるんだけどね。

そんな学校に瞬や、城ヶ崎姉妹などは通っているのですね。

## 第17話 文化祭？

それは夏の暑さが和らぎ、少しずつ季節が秋に変わりつつある10月初旬のこと。

もうすぐ、僕たちの学校では大きなイベントが開催される。

それがまた夏の暑さを取り戻すかのようなビッグイベントだ。

文化祭……

学生時代の思い出の一つにあげられるのではなからうか。

それに僕たちの学校は中学と高校だけであるのが文化祭で、

大学は大学で学園のために学園祭を開く。そして中学生、高校生はもっぱらお客扱いだった。

68

それでも、自分たちが主役になれる文化祭がもう目の前に迫っている。僕たちの文化祭は各クラスでひとつのものを作って、それぞれのクラスが一番すごかったかを決める一種の大会でもあった。それゆえ、かなり文化祭は燃える。

そんな文化祭をどうするか。それをクラスで話し合っている最中だった。

教壇には学級委員の西畑くんと上原さんが立っていた。話し合いの場では必ずこの2人がたつ。

「で、みなさん。どんなことをしたいですか？」

さっきからこの言葉を何回聞いただろうか。結構な回数聞いている。

だが僕は、全く考えていないわけではない。半分は考えている。でも、意識は教室の運動場側に座っている人だけの青空を眺めていた。今日は雲ひとつない。もう秋というのに今日は真夏日らしい。まっ、うちのクラスは冷房が効いてるから暑くはないんだけどね。

「……………あのお……………」

手を顔の横の高さまでしか上げていない女の子が小さい声でそうつぶやいた。今まで騒がしかったのに、こういう子がいるとすぐに静まり返る。いいのか、わるいのか……………

「はい、川？さん。何か意見でもあるの？」

「あ、あのお、い、意見というか……………この学園の模型を作りたいなあつて。」

「模型？」みんな頭の上に「？」が浮かんでいたがそれを読んだのか、西畑くんが聞いた。

「はいっ。発泡スチロールでもなんでも。もし、文化祭が終わったとしてもほかに使える手立てもありそうだし、今回のテーマにもあつてそうかなつておもつて……………」

なりほど。それは名案だ。僕は思った。しかも細かい作業も苦手なほうじゃないし。それにさっき言ってた今回のテーマと言うのは「エコ」だ。

作つて、終わつて、捨てるだけならめっちゃもつたいない。それをいつきは考えたのだろっ。僕は思い切つていうことに。

「俺は賛成だ。今回のテーマにぴったりじゃん。ほかに案がないな

「これでいいんじゃない？」

周りの反応をうかがう。みんな頷いている。ただ面倒だから頷いているのか、それとも本当にいいと思って頷いているのかは、すぐに見分けがつかない。今の状態では前者の方はいない。全員後者のほうだと思ふ。

「じゃ、多数決を取ります。川？さんの意見の賛成の人はいますか？」

「ほお〜い」

見事！全員手を上げているではないか。これもうちのクラスならではなんだ。案は浮かばないものの決まったらそれに向かって猪突猛進なのだ。

「じゃ、この学園の模型を作ると言うことで決定します。次に材料などですが……川？さん、発泡スチロールでいいのかな？」

「はい。プラスチックがいいならプラスチックでも構いませんが……」

「じゃ、一応両方買っておきましょう。では今から数人で買出しに行きます。そのほかの人は学園内を観察してきてください。あつ、メモを取るのを忘れないように。」

「了解！」

で、学級委員の西畑と上原といつきの3人は買出しに行くことになった。そのほかの人は観察だつよ。

何をすればいいんだろう。学園の全体像なら航空写真でいいのに……

「……ゆん」

「……」

「…瞬！」

はっ、やばい！

そう思っただけで恐る恐る振りむいてみた。

「何回呼ばせれば気が済むのよ。もう5回は呼んだわ。」

「そうなんだ。ごめん、考え事してたかも。」

「どうせ、航空写真うんぬんの事考えてたんでしょ？」

「お前はエスパーか！」

「私は神よ。」

「ああ、べっぴんさんの神様ですねえ」

「うふっ。照れる（笑）。じゃなくて！」

「えらく不機嫌やね。」

「屋上行こう。」

なんでこんな暑い日に日光を浴びに屋上に行かなければならないの

だろうか。汗かくじゃん。

「いやー！」

「いいからこい。」

「……はあ………」

なんか嫌な予感を残しながらたついていた。

第17話 文化祭？（後書き）

時期を変更しました

## 第18話 屋上からの眺め

ガチャン

僕は屋上に通じてるドアを開けた。真っ白な扉。

僕たちの学校の屋上は進入禁止などない。よく会社のビルの屋上にある小さな森のようになってる。

芝生も生えていて、観葉植物などもたくさんある。

相変わらず、あつついなあ……

一人でそんなことを思っていた。太陽のほうを見てみるとものすごく元気に輝いている。

こんなにゆつくりした時間をすごすのは久しぶりだった。最近忙しいからね。

木陰になっているベンチを探して2人で並んで腰かけた。なんだか2人つきりになるのは久しぶりのような気がする。

「ごめんね、急に。」

「いや、別に。大丈夫だよ。」

「今日の話は私のただの……その……嫉妬というか……」

「ん？」

「最近さあ、川？さんと何かあった？川？さんのこと下の名前で呼んでるから……ちょっと気になっちゃった。」

「ああ、そのことか。今日は何曜日だった？」

「そんなこと今関係ないでしょ？」

「あるんだって。で、本当に何曜日？」

「火曜日だけど……」

「それじゃ、明後日話す。明後日の昼ごはんはここで食べよう。それと俺が明日『VS山風』に出るって知ってるよね？だから、それ見て。そしたら話しやすいから。」

「どうしても今はだめなの？」

「うん。ごめんな。」

「分かった。じゃ明後日楽しみにしてるわ。」

「別に楽しみにするよつなものじゃないと思うけどな……」

すると立ち上がって晴海は言った。

「私を取るか川？さんをとるかはっきり決めておいてよ。」

そついうと入ってきたところとは別のところから校舎の中に入った。いった。

なんでだ。今のはどういう意味だ？なんでおれがいつきなんかと……

ふとフェンス越しにグラウンドのほうをしてみる。晴海をはじめと

する女子数人が固まって学園の観察をしている。

僕は目を閉じた。気温が高い中で木陰にいてしかも涼しい風が僕の体を包み込んでいる。暑くもなく、寒くもない。本当にこのまま寝ちやいそうだった。いや、寝ちやった。

寝ているときに急に現実に戻った。

なぜだろう。目を瞑ったまま考える。何か違和感がある。

ん？なんだこの感触……おかしいぞ

やっと気がついた。唇にほかの何かがついている。

目は瞑っているものの脳はすでに覚醒してフル稼働していた。

恐る恐る目を開ける。

そこには確かに人の顔があった。

顔が近すぎるため、誰か分からない。

見える範囲で推理しよう。

短い髪、きめの細かい肌。このシャンプーのにおい、あっ！目が開いた！二重で、目がすごく大きい。

唇に引っ付いていたものが徐々に接地面積を減らしていく。そして僕ははつきりとその人の顔を見た。

「あっ……………」

「うふっ」

相手は恥ずかしいからであろうか眼球だけを右に左に移動させているから目のやり場に困っているのだろう。

だが僕はその女の子を凝視していた。何も分からない素の状態で。  
ひどく変な顔だったであろう。

その女の子は……

## 第19話 揺らぐ心、女の怖さ

「い、いき……」

僕の目の前に立っている女の子。  
それは間違いなく川？いつきだった。

「隣、いい？」

「……うん。」

何分ぐらい寝たのだと思って携帯で時間を確認した。まだなんとか授業中のようだ。でも、晴海と分かれてからまだ20分しかたっていない。

「はあ……」

僕は思わずため息をついてしまった。そして携帯をポケットにしま  
う。

「こんなところで寝てたらだめじゃん。せつかく私がいい提案した  
って言うのに……」

ん？何かがおかしい。こいつ買い物の担当じゃなかったっけ？

「ねえ、いつきってさあ、買い物担当じゃなかった？」

「ああ、そのことなら私が夜、一人で買いに行くことになったの。」

「大変だねえ。」

「うん。それで、もしよかったらなんだけど……買い物に付き合ってくれないかな？」

え〜〜〜〜、これってありですか？

「ごめん、今日はまなみさんと打ち合わせが入って……今度のドラマのことで……」

「あつ、知ってる？私たちね、大河内さんの双子の息子と娘の役だつて。」

「ああ、そうなのか？そこまでは知らなかったな。本読みもちゃんとやれてなかったし。」

「うぶぶつ。」

「何がおかしいんだよ？」

「いや、瞬って話してて面白い人だなんて思って。」

「そ、そうか。まつ、とりあえず、ありがとう。」

しばしの沈黙……

「……あつ！アドレス教えて！お願い！」

「うぶ。うん。いいよ。」

その後赤外線でアドレスの交換を行った。それにしてもこのアドレス長いな……

「ありがと。じゃあね。瞬くんもしっかり観察しておいてね。」

「おう。」

そういつて晴海が校舎の中に入っていったところとは違うところから校舎の中に入っていった。数分遅れで僕もそのあとを追う。

もう、観察する気もないのでとりあえず教室に戻った。まあ、もちろん無人だ。

ブーブーブー……

携帯が振動した。メールだ。相手は……川？いつき！

<さっきはごめんなさい。寝顔を見たらついキスしたくなったから。ごめんね>

ああ、さっきのことが。せっかく忘れようとしてたのに。蒸し返された。

<ああ、別に大丈夫だから。気にしないで>

とは言ったものの、とてもドキドキした。

そして僕は晴海といつきの2人を天秤に乗せてしまった。  
心のかなでの葛藤が始まる。

いつき……かあ……。

晴海……かあ……。

たしかにいつきも晴海もタイプだ。

しかし僕は晴海と約束をした。一生一緒にいるって……  
この約束は破るつもりはない。

でも、自分の中では少しいつきのほうに傾いているのではないだろ  
うかと思う。

それを戻さないといけない。いや、逆転させなければいけない。

僕の中で<晴海>の戦いが始まった。

## 第20話 ついにきた木曜日の朝

「おはよお〜」

「……」

教室の中からの返事はない。それはそうでしょ。だって誰もいないもの。何で誰もいないの？だってまだ7時前だもん。

ということ、僕はとても早くに学校に登校した。それから5分ぐらいたって7時を少し過ぎたぐらいのときに教室のドアが開いた。

「おはよお……」

「よっ、いつき。早かったね。心の準備は大丈夫？」

「うん。おかげで昨日の夜、よく眠れたんだ。」

あっそ……ん？何かがおかしい。なに俺は納得しようとしてるんだ。

「普通、眠れなかったって言うんじゃないの？」

「いいや。本当にぐっすりだったよ。9時には寝たし。」

「ま、いいか。なに言われても気にすんなよ。」

「大丈夫っ！」

ああ、頼むからさのウインクだけ早めてくれ。目がハートになってしまっただろ！！

僕ら以外の人が学校にやってきたのは7時20分だった。

晴海とみつちゃんこと美波みなみとなつちゃんこと夏波ななみと学級委員の上原の4人。

入ってきた瞬間昨日の番組の話題をしていることが分かった。

「見た？あのロッククライミングのやつ。いつきちゃんと海斗くん超やばかった。2人とも運動神経超いいんだね。めっちゃ驚いたし。」  
となつちゃん。

「本当に。大河内さんもウケたね。」  
とみつちゃん。

「でもやっぱり海斗がすごかったね。ミスなんて一つもしてないし。」  
と晴海。

「ほとんどだれもミスはしてなかったけどね。あはははは。…ガラガラガラ…おはよう！珍しくいつきと瞬がいるぞー！」  
と声を上げたのは美波だった。

「朝から大きい声を出さないでください、美波さん。」

「本当に珍しいね。2人がこんな朝早くから学校に来てるなんて。」

「ま、事情がそれぞれあるんだよ。でも今日は俺が呼び出したんだけどな。」

「伊崎君、そんなこと言ったら晴海がやきもちやくでしょ。」

「晴海はそんなことな……って泣きまねやめろっ!」

「ヒクッ、ヒクッ」

「晴海、ごめんって。許して。……首を振らないでよ。何したら許してくれるの?……き、きす!ふざけたこと言っなって……(チユッ)(…あっ!」

「」「」「は!……!」「」「」

晴海以外のみんなが驚きの表情を見せていた。でも、この人数でよかった。

「あっ、やっぱりできちゃってた……」

「夏波、そういう言い方はやめなさい。子供ができたわけじゃないのに……」

「当たり前でしょ?ねえ?晴海?」

「私は別に今からでもい……」

「ダメ……!」

晴海はたまにこういうことを言う。なんかまだ慣れない……

「まっ、しょうがないから黙っててやるっ。」

「ありがとう。美波。」

「しゅ、瞬。ちよつと。」

誰かと思って振り向けばいつきだった。

「う、うん。じゃ、晴海。またあとで。」

「バイバイ。」

教室の窓側の席に移動してまたいつきと話を始めた。

## 第21話 木曜日の昼

僕はいつきといろいろな話をした。

主に僕がいつきに今までのことを聞いていた。なんで女優になったのか、今までそんな作品出でたのかとか。まあ、そんなまじめな話だけじゃなくてちゃんと、家の事情のことなども聞いたし、僕も話した。いつきはいつきで相当苦労してるらしいけどな。

結局、朝のHR の開始のチャイムが鳴るまで相当話し込んだ。なぜか今度遊びに行く約束まで……

そして退屈な退屈な午前中の授業が終わった。今日は普段よりも退屈ではなかった。1、2時間目は美術で、3時間目は古文、4時間目は英語だった。僕の得意科目が並んでいた。いよいよ晴海に呼ばれて説明する時間が来るとなると少し憂鬱になった。

そんなわけで僕はいつもどおり屋上にいる。おとといよりは日差しが少し弱い。雲ひとつない青空とまでは行かないが雲が2、3個浮かんでいるだけだ。僕はこっこのほうが空らしくていいと思う。

ガチャン！

重い扉があいて閉まる音がした。そっこのほうに目をやると晴海が少しテンション低めで歩いてきた。

僕の近くに来るやいなや

「ごめんなさいっ!」  
いきなり謝ってきたのでビックリした。

「ど、どうしたのいきなり?」

「いや、瞬が川?さんと同じドラマに出るなんて……だからいろいろ話してたんだね。」

「そ、そういうこと。分かってもらえた?」

「うん、納得。でも、変に疑ったりしてごめんね。」

「それは、晴海もいろいろ辛かったでしょうからね。こっちこそごめんね。でも、これから話すことも多くなるから……」

「そうなの?」

「ああ。あっちのほう演技とかに関しては先輩だから。ここでいろいろ指導してもらおう約束を立ててるんだ。だから一時は晴海に悲しい思いをさせるかも知れないけど……」

「そんなの全然平気。でも、川?さんのこと好きになったらだめだよ。」

「当たり前だろ。」

「ならいいんだけど。じゃ、私はこれで。」

「ああ、じゃあね。……ねえ、次の時間の授業なんだっけ?」

「あんた朝の先生の話聞いてなかったの？午後の3時間は文化祭の準備って言ったでしょ。」

「だったっけ？知らなかった。まあ、いいっか。ありがとー。」

「じゃあね。(チユツ)」

「おい、晴海、そういうのは学校でしていいものなのか？新聞部にも撮られたらややこしいぞ。」

「大丈夫よん」

そういうと晴海はさっきの出口から校舎の中に入っていった。

さっき言った新聞部の説明をしよう。新聞部とは主に中学校のニュースなどを説明する新聞を発行している部活だ。これは表向きなことだ。

しかし、その裏が怖いのだ。これは先生には極秘で作られているものがある。それは「校内恋事情」という新聞だ。これには誰と誰がどこで何をしていた、というものが報告される。これで報告されたものは周囲から厳しい目をされ、1ヶ月は軽く普段どおりの生活ができなくなる。

「新聞部……ねえ……」

一人でそうぼやいているとメールが届いた。この学園では生徒同士の連絡用に携帯電話を学園内で使用することを認めている。相手はいつきからだった。

く伊崎君は今日の3時間のうち最初に1時間は観察の係りになりま

した。しっかりお願いしますね。(どうせしないでしようが…)あの2時間は私のお手伝いです。内容はそのときになってからね。それじゃ。>

最近はずいぶんメールがよく来ることもある。でも、返信が短くなってしまいがつなので申し訳なく思っている。

<そのとおり。どうせいつきは模型を作らせるんだろ?そのときまで寝ておくとするよ。屋上でね。あ、この時間が終わったら電話で起こして。>

返信をすると空を見た。本当に空は青い。何で青いのだろう、宇宙は暗いのに……海の水の色を反射させていると聞いたが本当なのだろうか。だとしたら山の上の空は緑じゃないの?

ブーブーブー……

そんな変な考えはメールの着信音で中断された。

<もう、そうやって人にすぐ押し付けるんだから。ま、いいわ。起こしてあげる(はあと)>

返信を確認すると僕は静かに目と閉じた。

## 第22話 文化際？

あれからどれだけ寝ただろうか。約1時間の授業分だから50分と  
いったところだろうか。それにしてもぐっすり眠れた。木の葉っぱ  
が日光をいい具合に遮ってくれている。風も心地いい。

僕が目覚めるきっかけはもちろんいつきの電話だった。

<おはようございま〜す。もうそろそろチャイムが鳴りますよ〜。  
今から大変になるけど逃げないできてね。>

「俺が逃げるかつっ一の。ちゃんと行きますよお〜だ。」

<ならよろしいのよ。待つてるからね。>

「はい。電話ありがとうな。」

<いいえ。それじゃ。>

なんて優しいやつなのだろう。これを晴海に頼んだらその時点で拒  
否されるけどな。やっぱりやさしい人はいいですなあ。ってなに天  
秤に乗っけてるんだよ！ああ、もうだめかも……

ガラガラ……

教室のドアを開けた。今の教室の状態を一言で言うなら「臭い」だ。

おそらく発砲スチロール同士をくっつけるときに変なにおいの接着剤を使っているのだろう。

教室の真ん中にいつきはいた。黒板を見ると今日の振り分け表が貼ってあった。晴海はこの2時間が観察の時間らしい。

「よっ、いつき。」

「あっ、瞬じゃん。よく眠れた？」

「あんまり大きい声で言うな。おかげさまで何でもできそうだよ。」

「その言葉を信じるわ。重労働になるかもしれないけどがんばってね。」

「おう。ところで何をすればいいんだ？」

「これを見て。」

いつきが指を差した先にはたて2メートル横3メートルほどの板が横たわっていた。そこには砂や、芝生、木などが刺さっていた。なんとなく学園の形に見える。

「この1時間でここまでできたわ。」

「結構リアルだな。なんかこういうのは見たことがある。」

「そうでしょ？ここまで私が一人で作ったわ。で、伊崎くんは私と一緒にこの発砲スチロールを校舎の形に作っていくのを手伝ってほしいんだ。私は中学校と高校を作るから、伊崎くんは大学と図書館、

コンビニをお願いします。」

「ああ、任せてください。でも、軽く作り方を教えてもらえませんか？」

「いいわ。よく聞いていてね。……………」

「ああ、なるほどね。分かった分かった。じゃ、早速はじめさせていただきます。」

・  
・  
・  
・  
・  
・

「よっし完成つと。いつき、これどうだ？」

僕は中学校校舎と高校校舎を板の上に接着しているいつきに声をかけた。

「ん？どれどれ……………うん！完璧！さすが伊崎くんね。」

「まあ、そこまでほめないですよ……。」

「すごいじゃん。本当は2時間でやるところを1時間もかかってないんだし。」

そう。僕はいつきが2時間かけていいよといったところを1時間もかからずに終わってしまった。ただ、こつをつかむのが早かったからだろうか。

「でも、ほかにすることないでしょ？」

「明日の分までしちゃいますか？」

「いつきが”これ名案でしょ？”といわんばかりの表情で詰め寄ってくる。」

「ま、少しでも進んだほうがいいからね。ちなみに何をするの？」

「次に作るものはグンと難易度が上がるわよ。人とか車、そういうものを作るうかと。」

「よし、早く終わらせちゃおう。」

「今日じゃ絶対に終わらないわ。人を200体、車を130体つくるの。」

「そ、そんなに!？」

「でも、先に作ってる人がいるから少しは減ってるけどね。」

「分かった。はじめよう。」

僕は車、いつきは人を作り始めた。ここで僕はいいことを思いついたのだ。

1メートルある、長い発砲スチロールをそのまま車の形に切り取って、そのあと均等に分けていく方法をとった。そうすると10分で10体の車を作るのに成功した。休み時間返上でがんばったので計60分、60体を作った。

「伊崎くんってやっぱりすごいね。」

となりで同じようにがんばっていた美波と夏波が声をかけてくる。この前説明を忘れていたがこの2人は双子の姉妹だ。

「瞬、すごい……」

「ごちゃごちゃ言っていないでさっさと作れよ、夏波！」

「作ってるわ。でも私は器用じゃないから10分で1体しか作れないの。」

「私は3体作れるわよ。」

「美波、あんまり自慢することじゃないし。」

「美波、今何体作った？」

「えっと、3時間で……46体よ。」

「夏波は？」

「私は18体かな？」

「ってことは合計で……124体か……ってあと6体じゃん！よし、俺が作る。」

『おっ、がんばって！』

「双子だからってハモるなよ」

『しょうがないっしょ？』

「そうですね、はあ……」

授業の残りは8分。まあ、2分ぐらいオーバーしても大丈夫だろう。結局作ることにした。

キンコーンカーンコーン……

「終わった！」

チャイムと同時に6体に切ることができた。これで車は130体、すべて完成させることができた。

「いつき、車は終わったよ！」

「えっ！？嘘でしょ？」

「本当だつてば。意外にもあの双子が活躍してくれたけどね。」

「やっぱり雇つてよかった。」

「でも、相当疲れたらしいね。ほらっ。」

僕が指を指した先には双子が寝ていたのだ。

「まあ、無理もないわね。明日は観察でもさせようかな。」

「そのほうがいいね。」

今日は片づけをして学校はおわった。

### 第23話 文化際？

「起立、気をつけ、おはようございます！」

「「おはようございます」

僕たちのクラスの朝は西畑の号令で始まる。

いつもはくだらない先生の話だが、今日はいいいことが報告された。

「ええ、みなさん。文化際準備はがんばっているでしょうか？実は学園側で文化祭についての議論がなされています。別に中止にするというわけではありません。そこで、中学校と学園側の会議がありますので、今日の午前中は授業なしで、文化際準備をしてください。そして午後はいつもどおり文化際準備とします。質問はありませんか？……ありませんね。それでは終わります。」

「起立、気をつけ、ありがとうございます。」

「「ありがとうございます。」

ということでは今日は一日文化際準備に明け暮れることになった。それはそれで退屈なだけだね。

「ねえ、伊崎君、今日も私を手伝ってくれるかな？（ウインク）」

「なあ、頼むからそのウインクはやめてくれないか？」

「なんで？惚れちゃうから？それでもいいのに〜」

「うっ……」

そのとおりですよ、いつきさん。晴海はそういうこと絶対しないからね。

「ま、とにかく今日もよろしくお願いしますね？（ウインク）」

「うっ……はあい……」

今日も結構精神的にも肉体的にも疲れがきそうだな……昨日だって家に帰ったらもう直行でベッドに行つてダウンしたくらいだから……今夜は屋上で過ごしちゃうかもねw w

「で、今日は何するの？」

「そうだなあ……まず、車は終わったから次は人を完成させて、そのあとめっちゃ小さい筆で色塗りかな？あつ、心配しないで。これまだ完全に接着してないから。」

「なら楽だ。じゃ、ちよつと買い物してくる。」

「あつ、いつてらっしやい。」

そういつて僕はコンビニへ向かった。僕たちは3階に教室がある。そこから1階まで降りてさらに高校校舎を越え、高校校舎と大学校舎の間にコンビニにはある。

自動ドアを抜けるといかにもコンビニらしい客が入店した音に迎えられるとすぐさまドリンクコーナーに向かった。僕は迷わずイチゴオレを買う。そこでレジに向かうのがいつものきまりだった。

しかし、レジに向かっていた足がふと止まる。

僕はその瞬間あることを思い出した。

\*\*\*\*\*

それはある昼休みするとき。

同じように僕はコンビニにいた。

いつもと同じようにドリンクコーナーにいつきがいた。

その当時は今のように親しくなく、ただ同じクラスの女のこだなあと思っただけだった。

するといつきはフルーツオレを取った。そして財布を確認した。

そのあと商品を棚になおして、店を出て行ってしまった。

\*\*\*\*\*

僕はその当時のこと思い出した。

あの時はお金がなかっただけなんだろう。でも好きなのは確かだろう。

もう一回ドリンクコーナーに戻ってフルーツオレを手を取った。

そして会計をして教室へ向かった。

教室のドアを開けると昨日と同じような感じの雰囲気だった。

においはあの嫌な感じのにおい。

それに今日はペンキのにおいも混じっていた。

何でペンキってあんなに臭いんだろうね。たしかシンナーだったかな？あれ麻薬じゃないの？

それはさておき、昨日と同じところで作業しているいつきの元へ向かった。

「おつかれさん。少し遅れちゃってごめん。」

「ああ、遅かったね。大丈夫だよ。」

「ほれ。」

僕はいつきにフルーツオレを渡した。

「これどうしたの？私めっちゃ好きなんだよね。」

「だと思ったよ。」

「伊崎君ってエスパーなの？」

「違うわ！何でうちのクラスって”エスパー”って言う言葉がはやってるの？」

「そんなの知らないけどさ。とにかくはじめよう。私は人を作るから、伊崎君は色塗りをお願いね。ど校舎がなに色がぐらいは分かるでしょ？」

「まあ、毎日見てればね。」

「じゃ、よろしく。」

「わかった。でも、あと何体ぐらい人は作るんだ？」

「50体。」

「そんなにあるのか？この時間で終わりそうか？」

「ぎりぎりね。」

すげえな。人はただでさえ作るの難しそうなのに、それを50分で作るって……1分につき、1体だし。本当にいつきには脱帽。

僕はふと周囲を見回してみた。教室の後ろにはさすが乗っている机が集まっていた。それで約3分の1は教室が埋まっていた。残りの3分の2の真ん中のほうに模型を置くための板が設置されていた。それを取り囲むようにそれぞれの作業台がある。

それを順番に見回していったときに城ヶ崎晴海を見つけた。一瞬本当か分からなかった。前の方のほうにある役割表をみた。そこには確かに城ヶ崎晴海の文字があった。今日は木を作る班らしい。せつかく集中しているので話しかけないようにしよう。

そして僕は作業に入った。

3時間目の途中に僕がするべき色塗りは終わった。そのことをいつきに告げると休憩していいよっていったから僕はお気に入りの場所である屋上に来ている。今日も空を眺めてみる。いつもこのベンチに座ると気にしているわけではないのに空を眺めてしまう。

今日の空は……昨日よりは少し雲が多いかも。ちょっと寒い感じもする。

さっき買ってきた2個目のイチゴオレを飲む。

このイチゴ味がいいんだよね。本物のイチゴにすっごく似ている。このパックの中でイチゴをつぶして、北海道産の牛乳を混ぜてる感じ。

何も考えずに飲んでいるとズズズと音とともに液体が口の中に入っ  
てこなくなった。パックをつぶして少し離れているゴミ箱に向かっ  
て投げた。きれいな放物線を描いてゴミ箱まで一直線だったがふち  
に当たって地面に落ちてしまった。

「あっ……」

思わず言葉を発してしまった。そして中に入れようとしたら誰かが  
そのパックを拾い、ゴミ箱の中に入れてくれた。

「あつ、ありがとう。……ってどこの可愛いお嬢さんかと思ったら  
いつきじゃん！」

「そんなこといたら照れるう〜う〜。それよりポイ捨て禁止だよ。」

「だからちゃんと拾おうとしたもん。そしたらやさしいやさしいつきさんが拾ってくれただけ。」

「お世辞がうまいのね。隣いいかな？」

「おう。どうぞ。」

しばし空を見上げる。するといつきがしゃべり始めた。

「伊崎君明日どうする？」

「え、なにが？」

「学校だよ、学校。」

「そりゃ、普通どおりにきますけど？いつきは来ないのか？」

「うん。明日は休まないと……」

「なにか用事でも？」

どうせいつきのことだからバラエティーの収録か何かだろう。

「PSの撮影があるんだ。」

「ああ、PSか……ってことは俺も？」

ここで分からない人のために説明しておこう。

PSとはポリスストーリーの頭文字をとったもの。その名のとおり

刑事ドラマだ。

「当たり前でしょ！私たち双子の役なんだから一緒に出ないでどうするのよ！？」

「そっか。で、明日はどいじで？」

「スタジオだつて」

「了解。……あー……面倒くせー……でもがんばらないと。ね、いつき？」

「そっやね。さ、戻ろうか。わたしたちがいなくても大丈夫なレベルまで持っていこうよ。」

「そっだな。じゃ、いこか。」

ひとつの階の教室まで明日のことを話しながらもどった。

## 第24話 文化際？

「よしっ、ここまで終わらせれば大丈夫じゃない？」

いつきは模型が何個か乗せられている板を見ながら言った。今日は結局全部の時間を使って、人、色塗りを終わらせた。あとは木などの装飾品のみになった。明日は特に新しく作るものはなく、接着だけで終わらせるようだ。明日はもともと1時間しか時間がない。

「そうやね。少しは明日のこと心配減った？」

「うん、大丈夫。」

僕たちは腕を組み、板を見つめながら会話をしていた。明日僕たちは出演するドラマの撮影のため、学校を休むことになった。

そして放課後、僕たちは職員室の前にいる。

「失礼しまあす。」

「失礼します。」

僕は職員室の中を見渡す。そして担任の先生の席を見つけた。

「あのおく先生。明日僕たち休みます。」

「なんでまた2人して？」

その質問にはいつきが答えた。

「私たち、共演することになったんです。」

「共演か？そりゃ、珍しいな。撮影は何ヶ月ぐらいだ？」

「おそらく4ヶ月ぐらいでしょうか？」

「そんなにかあ。お前たちのおかげで結構そつという業界のほうも詳しくなっちゃったなあ。」

「ああ、そうですか。」

ぶつちやけどうでもいい話題だった。先生も最初のほうは僕たちが芸能活動していることを嫌っていた。仕事をやめないのなら学校をやめなさいとまで言われた。そこで僕は誓約書を書いた。学業を絶対におろそかにしに事を誓った。この誓約書があるおかげで、成績は常に上位のほうにすることができる。それはおいといて……

「とりあえず事情は分かった。だから早退とか多くなるんだろ？」

「ええ、まあ……」

「わかった。お偉いさんには私から話しておこう。」

『ありがとうございます』

僕たちは深々と頭を下げた。すると先生がいつも言っていることを言ってきた。

「で、ほかに共演者には誰がいるんだ？」

「大河内大先生がいらっしやいますが……」

すると先生はニヤツツとして

「伊崎、先生が話をつけるからわりに大河内さんにサー……」

「断ります！」

どうせ先生の言うことは分かる。大河内さんからサインをもらってきてほしいというのだろう。いつもそうだから。これまで4人もの共演者の方にサインをもらって先生に渡している。

「でも、時間がかかるならいいですけど。」

「いいのかあ？おい、伊崎本当にいいのか？」

「多分できますよ。」

すると隣で今までずっと会話を聞いているだけだったいつきが声を出した。

「本当にできるの？」

「最後の打ち上げで。あの方お酒が入るとなんでもしてくれるんだって。……ということですよ。でわ、失礼します。」

「失礼します。」

職員室を出たらいつきが聞いてきた。

「今まで私先生にいちいち報告してなかったんだけど、大丈夫かな？」

「大丈夫でしょう。欠席するのに理由なんて要らないし。」

「じゃ、いいや。あつ、私用事があるからこれで。じゃあね（ウインク）」

「それやめろって。マジでほれる。」

「いいよあゝ別に。そんじゃ。」

そういつていつきはコンビニに方向に歩いていった。

僕は家に帰ろうと思いとりあえずかばんをとり教室に入った。

そこには一人の女の子が板を見つめながらたっていた。

その女の子の名前は確か……

思い出す前に相手が話しかけてきた。

「あつ、伊崎君……どうしたの？こんな時間に。」

「今まで職員室に行つてて。」

「あつ、怒られたんだ。」

「ちがうつーの!」

あつ、思い出した。この女の子の名前は安藤美野里だ。

「安藤こそ何してるの?」

「いや、ちょっと……なんか、思い出し泣きつていうのかな?」

「悲しいことでもあったんだ。」

「うん、まあいろいろとね。じゃ、私は帰るわ。じゃ、明日ね。」

「明日来ないから明後日だね。」

「そうなんだ。残念。それじゃ。」

そういつと帰っていった。一体何があったんだろつな……

ブーブーブー

久しぶりにメールが来た。誰かと思ったら親友の猛だった。あいつからメールしてくるのは本当に珍しいことだ。

< ちよつと相談がある。屋上で待ってる。 >

猛が相談というのはあまり真剣なものではなかった。でも、今回はな

んか違うような感じがした。

<了解>

せっかく帰ろうと思ったものの、親友の誘いは断るわけには行かないので屋上に行くことにした。

## 第25話 猛です。

こんにちはみなさん。僕の名前は田嶋<sup>たじまたける</sup>猛です。1組の伊崎瞬くん親友です。

この話はなぜか僕目線のお話になってしまいました。よければ話しを聞いてください。

突然だが、僕には好きな人がいる。

ここでぶつちやけてもいいのだが、あえて言わないようにしよう。でもあとになつたら分かるよ。

\*\*\*\*\*

この日はいつもどおり文化祭の準備をしていた。毎回この時間になると隣の1組から変なおいが漂ってくる。なのでうちのクラスは窓を閉めて完全防臭で作業に当たっている。

僕たちのクラス展示は神社だ。

なぜ、神社にしたかというと、たくさんの人に集まってほしいから。文化当日は校内のいたるところに張り紙をしてお客さん呼び寄せ。絵馬に願いを書いてもらって飾る。そして僕たちの作品は最後の最後に完成するのだ。

僕がしている作業は色塗り。1組と違ってペンキは使わない。瞬がさんざんぼやいていた。”なんであんなにおいのするものを使うのか”と。あいつらしいっていえばらしい。僕たちはおとなしく絵の具を使う。

この日もいつもどおりに文化祭の準備は終わった。

そして管理棟の用具準備室に使った工具を片付けてやっと帰れるようになった。そのあとうれいようなうれしくないようなことが起こるのだった。

階段を上ってやっと3階までたどり着いた。そして教室に入る。

ガラガラガラ……

ん？誰だ？見慣れない女の子のシルエットがあった。  
こういってはなんだが、僕は同じクラスの女子を後姿だけで誰かが分かる。

でも、この子はわからない。つまり同じクラスではない。恐る恐る声をかけてみた。

「あのお〜どなた？」

するとその女の子はこっちを振りかえった。しかし、誰かは分からなかった。ちょうど逆行になっていて、その人を包み込むかのよう  
に日光が出ている。

僕は思わず眉を細める。

「この声で分からないかな？小さいころはよくいつしよにいたの  
ね。」

「ん？美野里か？」

その女の子はこちらにすたすたと歩いてきた。だんだんこちらに近づくとつれて顔をはつきり見ることができた。間違いない。こいつは俺の幼馴染の安藤美野里だ。芸能人で言ったら宮澤佐江似の女の子だ。でもなんでここにいるのだろう。

「なんで美野里がここにいるんだよ？」

「あんたに用があるからに決まってるでしょ。」

「俺早く帰りたんだわ。早くしてもらえば助かるんだけど……」

「じゃ、単刀直入に聞くね。私のことどう思ってる？」

「私って、美野里のことか？」

「そうにきまつてるでしょ！ほかに誰もいないんだから。」

「美野里のことか……普通に幼馴染にしか思えない、かな？」

「そっか。そうなんだね。猛にはそうとしか思っていないんだね……わかった。ありがとう。じゃあね。」

「おい、ちょ、ちょっと待てよ……」

俺は美野里をとめることができなかった。どうしてだろう？いつも俺なら走って追いつき、腕をつかんで聞きただすだろう。なのに今日の俺はできなかった。何かがおかしい。これを誰か、気づいてくれないものだろうか。

ふと顔が浮かんだのは親友の瞬だった。メールをしたら屋上に来てくれるとのこと。俺は先に行って瞬を待っていることにした。屋上から見える夕焼けはこんなにも美しいものなのか。

あまり時間がたたないうちに瞬がきた。

「お前から呼び出しながら珍しくもないけど、今日は真剣な話なんだろう？」

やっぱり瞬は分かってくれていた。俺はいい親友を持ったものだ。

「ああ。美野里と俺の関係は知ってるよな？」

「確か、幼馴染だったよな？」

「ああ。それがなんか今日、あいつの様子がおかしかったんだ。」

「あいつ、教室で泣いてたぞ？」

「それ、本当か？」

「ああ、話せば長くなるんだが……」

といいながらも、瞬は話してくれた。なるほどなと思った。

「それがさ、多分その前だと思うんだけど……」

俺は美野里と話したことをすべて話した。すると瞬は少し怒ったような表情になりこっぴつた。

「自分のことどうかって聞かれて”幼馴染”としか答えなかったのか？」

「ああ。」

「バカか。そういうのに猛は鈍感じゃないと思ってたのに……どう考えたって告白しかないやろ？」

「こゝ、告白？」

「ああ。幼馴染だからこそその恋だ。」

「幼馴染だからこそその恋……」

「ああ。多分お前としては幼いころからずっと一緒に居たわけだから異性としてみれないんだろ？だが、美野里は違ったんだ。あいつは猛のことを異性として見れたんだよ。」

「幼馴染だから気づかなかったってことか？」

「まあ、そういうことになるだろうな。で、お前の気持ちはどうなんだよ？好きなのか？嫌いなのか？」

「分からない。本当に分からないんだ。瞬の言ったとおり、まだ異性として見れてないのだと思う。」

「ああ、そのはずだ。一晩じっくり考えたらどうだ？」

「そうするか。」

「じゃ、俺は帰るな。じゃ。」

「ありがとう、瞬。おれ、お前が親友でよかったって改めて思ったよ。」

「いまさら恥ずかしいことを言うな。」

瞬は後ろを振り向くことなく言った。さりげなくかつこいいんだよな。

僕は再び空に目を戻した。

真っ赤にそまつた空がなぜか僕を応援してくれているように感じた。太陽がやさしく俺に微笑んでいる。

第25話 猛です。(後書き)

新しい登場人物

安藤美野里あんだつみのり

田嶋猛の幼馴染。瞬と同じクラス。

## 第26話 猛の恋!?

安藤美野里。

僕の初めての友達といってもいい。小さいころ僕は人見知りがものすごく激しかった。そのせいで、幼稚園のころから常に先生の後ろに隠れているような子供だった。

そんなある日、一人の少女が話しかけてきた。とても明るい人で、可愛かった。美野里は小さいころから僕のお姉ちゃん的な存在になっていた。子供だけの交流だけではなく、親同士も仲がよかった。一般的な幼馴染の関係というのだろうか。小学校入学までは一緒にお風呂も入ったし、中学に入るまではお泊りの回数も多かった。さすがにこの年頃になると、回数は減った。

だから今日の出来事はビックリした。3年になってから今日始めて話した。瞬はそれは告白だといった。もしそうだったら相当失礼なことをしてしまった。今なら分かる。幼馴染だから分かる。でも、その当時は分からなかった。相当テンパっていたのだろうか。

板張りの天井をベッドに横になりながらぼんやりと眺めていた。この天井に美野里とであったときから現在までがドキュメンタリー映画のようにどんどん思い出していく。結構鮮明な映像だ。

ブブブブー、ブブブブー

メールだ。相手は美野里だった。緊張がマックスになる。

<今日いきなりごめんなさい。話のが久しぶりすぎて……また今度

泊まりに行ってもいい？>

いきなりお泊り交渉ってなんだよ……話をわざとぼかしているだけなのか……

<親がいいというならな。>

この返信をしてすぐ瞬にメールをした。

<瞬、俺は美野里のことが好きじゃないと思うんだ。俺には好きな人がいる。それを伝えていいかな！？>

あいつは返信が早いことで学年で有名だ。そのとおり1分で返事が来た。

<それが自分の気持ちなんだろ？いいんじゃない？成功を祈る！>

なんであいつはいつも優しいのだろう。本当にいい友達だ。

僕は覚悟を決める。男として覚悟を決める。

ブブブブブブ

来た！美野里からのメールだ。

<ありがとう。今日言いたかったことはね。……私ね、猛のことが好きなんだ。>

瞬の言ったとおりだった。これが告白というもののなのか。でも、ごめん。美野里。俺には好きな人がいる。そのことをどう伝えていいのか分からない。ありのままに伝えればいいのか。傷つかないように言った方がいいのか。

< そうなんだ。俺はなんて答えればいいのか？ >

この返信を待つ時間はなんとも言いがたい緊張がある。着信音になると体がビクツとなってしまう。

自分で自分がソワソワしているのが思いつきり分かる。

< 付き合っていていいか悪いか、でいいかな？ >

ここは簡潔にこの文で締めよう。

< ごめん。俺には好きな人がいるんだ。 >

瞬に昔聞いたことがあった。告白されて振るならどういったほうがいいのかなど。昔は冗談半分で話していたのだが、今になってみれば確かになとおもう。

< だ、誰？ >

おいおい、それって普通聞くものなのか？で、聞かれたら答えるものなのか？

< 川？いつきさんだ。 >

そう。初力ミングアウトだが、俺は川？いつきさんが好きなんだ。これは中学校入学したときに一目ぼれだった。それなりに仲がいい

と思っているのだが、相手はどう思っているのか分からない。  
このカミングアウトは正しかったのだろうか。いや、正しいと思う  
しかない。

<そっか。正直に話してくれてありがとうね。これからも猛の幼馴染・  
安藤美野里をよろしくお願いします。>

<美野里は本当にいいやつだな。こういう幼馴染がいて俺は幸せで  
す。じゃ、おやすみ>

自分の中で一つなにか壁を越えたような気分になった。一応瞬にも  
お礼のメールを入れておくか。

<瞬ありがとう。いろいろとね。結局自分の好きな人を伝えること  
ができたよ。>

しかし、瞬からの返信は来なかった。あいつは明日からドラマの撮  
影らしいから早めに寝ているんだろう。そんなことで俺も早く寝る  
ことにしよう。

## 第27話 P・S ポリス・ストーリー？

今日の朝の目覚めはよかった。いつも以上にすっきりとしゃきっと起きることが出来た。

カーテンを開ける。朝日を浴びる。ということは出来なかった。

まだ朝4時。太陽はまだ昇っていない。あたりはまだ静けさの中にいた。まだ外の世界は暗い。真っ黒というより、群青色にしている。

今僕は、駅のホームに立っている。電車を待っている。この時間はまだお客さんは多くはないものの、ぼつぼつサラリーマンらしき大人がいる。中学生は俺しかない。

ブルルルル、ブルルルル……

こんなときに電話が来るなんて初めてだ。母さんが誰かだろうか。

「はい、もしもし？」

『あつ、伊崎くん？今どこ？』

「どこって城見駅の5番ホーム。」

『そっか。じゃ、またあとで。』

「お、おう。」

会話の内容が自分には分からないまま電話が切れた。

<まもなく、5番線に、列車が、参ります。ホームでお待ちの方は、黄色い線の、内側で、お待ちください。>

駅の放送案内が聞こえた。どうしてこう途切れ途切れで機械っぽい声なのだろう。そう思っていると長い電車が入ってきた。僕はいつも1両目に乗る。まえ、何かの鉄道事故があったが、そんなことは関係なく、一番前に乗っている。

列車が止まり、ドアが開いた。

長いすの端っこに座る。この車両には4、5人しか乗っていない。

僕は軽く目をつむる。家にいてこの時間なら普通に寝ることは出来る。だが、リズムカルに刻まれている電車の音や、揺れが邪魔をして眠れない。別に、今日に限ったことではなくて毎回だ。

2つ目の駅を過ぎたときのこと。

電車は相変わらず、リズムカルな音が耳から聞こえてくる。

ツンツン

何者かに左の頬っぺたを突付かれた。目を開け左側のほうを見上げてみる。目がぼやけているせいか、顔がはつきりと分らないが目をこすって見てみるとその人はいつきだった。

「い、いつきだし。」

「そんな変態を見るような目で見ないですよ。」

「ま、それはそのとおりだけど……なんでここにいるんだよ?」

「お台場に行くから。」

「それは分かってるよ。でも、電話したよね？」

自分でもまだ納得していなかったので聞いてみることにした。話が長くなると感じたのが、隣にいつきが座った。

「もしかしたら、この電車かなって思って。念のために電話したの。」

「でも、なんでこんなに早く行かないといけないんだ？」

「そんなの私に聞いても知らないわよ。」

「だよねえ。」

それから僕たちは今日朝が早いことについて愚痴を言い合いながら、電車を乗り継いでお台場のジフテレビについた。

入り口に僕のマネージャーの井上まなみさんといつきのマネージャーの本脇梨乃ほんわきりのさんが迎えてくれた。

僕たちは楽屋に入ると、衣装に着替えてマネージャーさんたちを含め、4人で話していた。ちなみに衣装というのはブルーのパジャマだった。

6時を過ぎるとどんどん共演者の方々が集まってきた。

## 第28話 P・S ポリス・ストーリー？

「ひゃあ〜、疲れたなあ。」

「もう、体がボロボロだよ〜」

嘆いているのは僕といつき。やっと撮影が終わった。

と、いつても全部じゃなくて1話の半分も撮っていないらしい。今日、撮影がスタートしたのは午前7時。ただいまの時刻は……午後8時23分。

約13時間は撮っているのかな？その間に衣装を変えたり、なかなか1発OKが出なくて……

今日の楽屋はみんなぐったりモードだった。

誰もが楽屋にはいるやいなや座って下を向いて目を瞑っていた。大河内さんは撮影自体が久しぶりらしくて、楽屋ではいつも横になっ  
て寝ていた。

今日の撮影が終わった瞬間に操り人形の糸が切れたかのようにみんな疲れた表情を見せていた。

\*\*\*\*\*

夜のお台場は気持ちがいい。心地よい風も吹いているし、周りは海だからたまに匂う潮のにおいがたまらない。

今僕は撮影が終わって、ジフテレビの周りを散歩している。普通にそのまま帰ればいいじゃんって思うでしょ？それがそうも行かないんだよ。誰かが止めてるからね。……ん？誰か知りたい？この話の流れからして誰かわかるでしょ？……そう、いつきだよ。

\*\*\*\*\*

いつきは急にマネージャーさんとの打ち合わせが入ったから待ってほしいといった。それを告げられたのは楽屋を出て局の出口に向かっていたときのこと。

「瞬、もう帰るの？」

なぜかゼエゼエと息を切らしている。

「うん。もうすることないし。帰る。」

「あのさあ、私が終わるまで待ってくれないかな？」

顔の前で合掌をして、片方の目を閉じていて、口では「お願い」と何回も言っている。

「あほか！なんでこんなときまでいつきのことを待つかかないといけないんだ？」

すると今までの立場が逆転した。いつきが腕を組み、眉間にしわを寄せていた。

「あつそ。瞬はそんな人だったんだ。こんな可愛いレディーを置いて一人で帰るんだ。ああ、そでいいわよ。もし私に何かあったらすぐにあなたの名前を出してあげるわ。それじゃ、お疲れ様。」

そういうときれいに回れ右をして中のほうに消えていった。

さすがにそんなことをいわれたら……ねえ？少しは考えちゃうでしょ？いつきも少し気が強いけど緒戦は女の子なんだから。

\*\*\*\*\*

という経緯があつて今に至つてるわけ。

別に局のロビーのソファに座って待つててもいいんだけど、それだとなんか勿体無い感じがして、今こうして局の周りを散歩しているわけだ。

確か……今3周目だよな。

3周歩いたけど10数人としかすれ違つていない。人が少ないのかなあ……警察官とはよくすれ違ふんだよな。その度変な目で見られる。職質かけられそうだよ。

ジフテレビの正面玄関まで300メートルを切ったぐらいのところ  
で居つきのマネージャーの本脇さんからメールが来た。

<いつきちゃんと打ち合わせ終わりそうです。>

僕はすれ違いを防ぐために本脇さんに終わりそうになったらメール  
くださいと言つておいたのだ。

<了解しました。ありがとうございます。>

この連絡を受けてから僕はゆりかもめの駅の改札の前で待っていた。すると5分ほどしてからいつきが歩いてくるのが分かった。この季節はもういつきにとっては冬なのだろうか。赤いコートを羽織っている。

「いつきー！」

僕は叫んだ。いつきは今まで穴が開くように凝視していた地面から目をなし、僕のほうを見た。

一瞬止まってからいきなり走り出したかと思うと

「しゅーーーーー！ーーーーーん！」

と叫びながらこっちに走ってきた。止まる気配がないいつきはそのまま僕に突進してくる。いくら女の子だろうとこのスピードで突っ込んできたら俺は吹っ飛ぶだろうな、と思いながらスツと右足を後ろに下げて受け止める体勢を作った。

「わあ~~~~~！ボタンッ！」

あの威力は半端じゃなかった。思わず尻餅をついてしまった。そのままならまだいいのだが、勢いが収まることなく僕は地面にたたきつけられた。最初にたたきつけたお尻と背中がジンジンする。

「あっ！ごめん！」

そういつといつきは僕の手を握って引つ張って起こそうとする。僕はそれの力を利用して起き上がることに成功した。

「本当にごめんっ!……っい……」

「あ、別に大丈夫。っっていうかそれより早く帰りましようよ。」

「何で待っててくれたの?」

僕はあえて無視をした。その間に改札を抜けホームに立つ。いつきは黙って僕のあとをついてきている。

「ねえ、なんで待っててくれたの?」

一瞬考える。でもすぐに歩きながら考えた嘘を言った。

「本脇さんに言われたからだよ。なんか逆らえなかった。」

「やっぱり梨乃さんかあ……でも瞬。ありがとう。」

「……」

「やっぱり好きな人を瞬に選んでよかった。」

独り言のようにぼそっといつきが言った。

僕は体が硬直してしまった。動揺しているのだろう。

な、なんだ!?この感覚は……

## 第29話 喧嘩の火種は新聞部！？

「おいっ！どういことなんだよ！説明しろよ！」

僕は手に持っている新聞を突き出す。

「……………」

「何でだんまりなんだよ！ちゃんと答えろよ！」

「……………」

「もういい！」

それは文化祭が3日後に迫った日だった。最初の撮影の日から1週間が経とうとしていた日のこと。

僕は屋上にいた。もうあの場所が嫌で逃げ出して今は教室にいる。

この会話からして喧嘩しているということは分かるだろう。相手は城ヶ崎晴海だ。

なんか久しぶりの登場のようなきがする。そこは気にしないでいい。

僕は手に新聞部の「校内恋事情」という新聞を持っている。  
今回の喧嘩の火種はこの新聞だ。

見出しは

「城ヶ崎晴海、彼氏がいるのに禁断の浮気！？相手は学校一のイケメンで有名な伊藤天翔！」というものだった。

写真付の記事だ。日付は僕といつきがP・Sの撮影で休んでいる日だった。場所は僕のお気に入り屋上のベンチ。天翔と晴海がキスをしている写真だった。

これは僕にとつてもものすごい衝撃だった。僕はいつきのことを気にはしていたが、好きにはなっていない。これは絶対に僕が浮気をしていたとはいえないだろう。確かに僕はいつきにキスされたことはあった。しかし晴海たちとの決定的な違いが存在する。

それは付き合っているかいないかというところ。

新聞記事にはこのようなことが書いてあった。

「私たちはこの2人の会話を聞くことに成功しました。一部を掲載したいと思います。」

< ねえ、私たちつて一応付き合ってるんだよね？ >

< 当たり前だろ！それより伊崎はいいのか？ >

< 瞬？ああ、別にもういいわ。 >

< 今その言葉を聞いて少し安心したよ。 >

< ずっと一緒にいようね。(チュッ) >

< 大好きだよ晴海。 >

< 私もよ。天翔 >

以上が会話の一部抜粋でした。」

と書いてあったのだ。本当にショックだった。僕は何も考えることも出来ない。ボーっとそしているので精一杯だ。

ガラガラガラ…バンッ!

ドアが大きい音を上げて開いたのと同時に叫び声が聞こえた。

「おいっ！瞬！やっと見つけた！大丈夫か！」

なぜか猛を見た瞬間なぜか分からないが涙が大量に出てきた。

「たけるうー！ー！」

入り口に立っている猛に向かって突進して抱きついた。猛は優しく受け止めてくれる。

「お前が辛いのはよく分かるわ。今は思う存分泣けばいい。恥ずかしい思いなんて捨てて思いっきり泣けばいい。」

猛はそんな言葉をかけてくれた。おそらく教室には晴海以外の全員がいただろう。そんなみんな前で僕は泣いている。顔を上げてみんなの表情を伺ってみれば、かける言葉がなくて困っているという感じだった。

「猛！おれはこれからどうすればいいんだ！？」

「それはじっくり考えたほうがいい。今急いで結論は出さないほうがいい。」

まだ僕の涙は止まらない。猛は変わらず抱き返してくれる。本当に猛はいい親友だ。

「おい、伊崎大丈夫か？」

関西のイントネーションで話しかけてきたのは南海だった。南海もすごく心配してくれてるように感じた。

「俺はお前の仲間やから、なんでも相談しいや。なあみんな？」

「ああ。もちろんだ。」

みんなが頷いてくれている。本当にいいやつらだ。

「みんなありがとう。本当にいい友達を持ったと思ってる。でも、これだけはお願したい。晴海のことを軽蔑した目でみないでほしい。いいか？」

みんなを見回した。その話題には触れてほしくなかったのか。何人かの人は顔を下げた。

「それは当たり前やん。俺らもそんなに意地悪やない。」

「ありがとう南海。本当にありがとう。みんなもありがとう。俺もいつまでも泣いていたらいけないね。がんばるわ。切り替えていくわ。」

「無理はすんなよ」

「ありがとう。」

猛にもお礼を言った。そしたらみんな同様、何でも話せといってくれた。本当にありがたかった。

僕は席に着く。教材を出す。だが何も出来ない。ただ教科書の表紙を眺めているだけだった。

残りの授業は聞けるわけもなく、ボーっとしていた。

これは自然消滅しかないのだろうか……

第29話 喧嘩の火種は新聞部！？（後書き）

前回の登場人物に載っていなかったひとを紹介します。

なんかいたくと  
南海拓斗

関西出身でまだ関西弁が抜けていない。

ほんわきりの  
本脇梨乃

高橋いつきこと川？いつきのマネージャー

## お詫びとお願い

まことに勝手ながらこの小説をここで完結させたいと思います。

その理由は小説全体の構成をしていなかったためです。

それが今となっては一つの重荷になっていました。

ので、このシリーズは完結とさせていただきます。

が、しかし!!!

登場人物の名前や設定を少し変えた

「新・僕は芸能人、だけど中学生。」を企画中です。

早ければ5月中には連載を開始したいと思しますので、そちらのほうもよろしく願います。

お気に入り登録してくださった10人の方には申し訳ないと思いますが、新作のほうも拝読いただけたらうれしいです。

まだまだ未熟な僕ですが、これからもよろしく願います。

伊崎瞬

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0354r/>

---

僕は芸能人、だけど中学生

2011年4月24日16時52分発行